
2つの大和 ～没落と再生の日～

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの大和　～没落と再生の日～

【Nコード】

N7708M

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

2030年、突如発生したメタンハイドレート採掘施設の事故騒動。作業中にメタンハイドレートが流出した事を受け、世界各国は非難。公害国としてのレッテルを貼られてしまう。日本は状況打開の為、空母建造に着手。そして2039年、完成した航空機搭載型護衛艦『やまと』は初任務中、謎の爆風と閃光に巻き込まれてしまう。漂流するやまとの目の前に現れたのは、大日本帝国海軍の戦艦『大和』だった……。

序章 絶望の日（前書き）

拙い文ではありますが、よろしく願います。

序章 絶望の日

2030年8月12日Am00:55

高知県室戸岬沖南東130キロ

メタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム/海上掘削施設
『きぼう』

作業員の宮島はプラットホームの鋼の床に足を据え、黒き海洋に漂う白い霧に目を睜った。息を吸え。宮島は肺一杯に空気を吸い込むと、施設内の澱んだ空気との違いを強く感じ、更なる高揚と喜びを噛み締める為、再度呼吸する。

後ろからはレーザードリルの掘削音。その振動が背を伝い、偏西風による生暖かい風と相まって身体に伝え込んだ。

同僚から失敬した使い捨てのライターを手に持ち、口元に据えられた煙草に火が着き始めた頃、奇妙とも思える光景が闇間から姿を現し始めた。

一筋の光。

漆黒の闇空を煌々と照らすその光源は、真つ直ぐと此処『きぼう』へと向かい、順次飛翔中である。それに素早く気付いたのは宮島であり、すぐにその事は他の面々も知る所となり始めていた。

鋼の甲板を駆け抜け、第2セクターの実験棟。硬質ガラスと清潔な床に覆われる区間を宮島は疾風の如く駆け抜ける。偶然廊下に居合わせた白衣に身を包む垢抜けた研究員の男は不思議そうな表情で必死に走る宮島を見据え、思わず声を掛けた。

「どうしたんだ？」

研究員の不思議そうな口調に対し、宮島は口早に答えた。

「何かが此処に近付いてるんだ。空からな！」

空から？ヘリか何かじゃないのか？

考え込み俯く研究員が視線を上げた頃には、既に宮島の姿は無く、点々と灯る廊下を走っていくのが見えた。

鋼鉄の階段を駆け下り、息を切らしながら駆ける宮島の視界に、レーザードリル掘削班主任の木野が映り込む。クリップボードと黒い染みの付いたコーヒーマグを持つ木野は頭に白のヘルメットを被り、骨太の身体は汗で滲んだ作業服のせい、より強調されている。

「どうした宮島？」

本日二回目の質問。

そして二回目の応答を宮島は半ば不安になりつつ伝えた。

「いえ……あの……空から何かが近付いて来ているんですよ」

「空からか？確か物資輸送用のヘリは午前十時頃に来る予定だったが……」

変更されたというのが妥当だろうと木野は考えた。背後で蠢く三菱高出力レーザー掘削機は繊細な構造故、深海掘削を行うに当たっては万全の体制を整えなければならない。

さほど考え込む事では無い。宮島は考え過ぎだ。

「少し仮眠を取ったらどうだ？」

軽く流されてしまったのを実感した宮島は、いぶかしげな表情を見せながらもためらいがちに頷き、掘削室を後にした。

仮眠室を目指す宮島の足は重かった。

プラットホームの外に目をやると、その光源は着実に大きさを増しており、いつ来てもおかしく無い。あまりにも強過ぎるその光は今までに見てきたヘリの光源とは全くの別物であり、やはり違和感を覚えずにはいられない。

それはどんどん大きくなる。

宮島の足が一步前に進む度、光は増して巨大化する。

僅か数十秒後、その光源は施設上空に到達し、一気に爆発した。白い靄のような物と何か異質な物質が瞬時に施設内へと入り込み、

宮島は寒気と不気味なエネルギーのさざめきを痛感した。

何なんだ……？

宮島はきびすを返し、掘削区間へと足を踏み出した。鋼の階段まで差し掛かった所で、突如爆発音が生じ、熱風と悲鳴が階段の下から昇ってきた。

階段を下りた頃には、既にレーザードリルの姿は無かった。

黒煙と残骸に包まれる掘削区間には、人の姿は無い。代わりに地面に横たわる炭の塊が九つ、そして血溜まりが数箇所に出現している。

「主任！主任！」

宮島は叫んだが、返答は無い。そんな中、かく乱する宮島の視界は黒焦げの塊ではなく、あるものを発見した。

生身の人間。

その人物の顔に対し、宮島は見覚えがあつた。一緒に掘削班で作業を共にしていた韓国人の男。その男は不敵な笑みを浮かべつつ、黒土と化す甲板をゆつくりと奥へ進み、消えた。

それが全ての発端。

気付いた頃には、宮島は隔離病棟のベッドに横たわっていた。

記憶は混乱と衝撃の最中、欠如していた。自分が救助用ボートに乗り、そこで発病した所までははっきりと覚えている。

だが、そこから過去が欠落しつつある。

——医師が言う。「あの患者は助からない」

そこで付け加えられる言葉「化学兵器——恐らくVXガス」これに尽きた。

花の入った花瓶の横に置かれた小型のテレビからは、『テポドン3。日本近海に墜落』

病弱な身体を奮い立て、ここに真実を書き記す。

——『きぼう事件の真相』より抜粋。

あの日以来。日本は変わった。

“きぼう”は“ぜつぼう”と化し、訳の分からない環境信者達はメタンハイドレート流出で地球温暖化が進んだと言い、欧州各国は環境に“日本製品は不良品”と言う言葉を添えて批判した。オーストラリアは鯨がどうのこうの言い、シーシェパードとつるんで痛烈に批判。アメリカに至っては完全な無視を決め付けている。

日本は打開策を探した。

メイドイン・ジャパンは不良の代名詞。

環境大国は中国と並ぶ公害国に降格。

経済不安。環境不安。政治不安。エネルギー不安。

それを誘発させた一番の張本人と言えば、日本のマスコミだった。元々メタンハイドレートを未来の代替燃料と言ってきた彼らは、途端に手の平を返してメタンハイドレートがコスト的にまったく儲からないと説明。採掘事業自体を否定した。

同時期に発射され、海に墜落したとされるテポドン3は無弾頭だったと北朝鮮側は主張。施設での爆破騒ぎも調査の末、人為的なものであり、一部救助者達の患うVXガスの症状は北朝鮮の核の力によつて黙殺され、謎の韓国人証言も否定された。

2030年、幕を開けたこの事件の末、遂に日本は空母建設に乗り出す事となっていく。

全ては状況打開の為、新たな採掘事業を立て、不足する原油事情の中で優位に立つ為である。

序章 絶望の日（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

一章『没落』 1話 護衛艦やまと

2039年5月28日Am11:01

神奈川県横須賀基地

三等海佐の新城樹は、眼下に望む巨大な空母に目を見開いていた。航空機搭載型護衛艦『やまと』の重厚な巨躯と前甲板に停められたF-35戦闘機は明らかに大規模な空母にしか置く事が許されない存在であつたが、この艦はあくまでも護衛艦だ。その点から、野党や諸外国、反戦主義者達は『キエフ級重航空巡洋艦のような存在』と激しく批判した。

ニミッツ級とジェラルド・R・フォード級空母をベースに設計されたやまと級は、全長330m。コンピューターや工業用ロボットにより完全オートメーション化されており、電磁式カタパルト、高いステルス性能を持つ。

さらに、メタンハイドレート採掘の為にレーザー技術を応用して開発された全方位防衛シールド『カタクラフトシステム』を採用した世界初のシールド防衛イージス艦である。二層になったシールドは、外側層が物理的攻撃に対応したエネルギー凝縮状のエネルギー壁。そしてその内側に高圧電流が走っており、それによって飛翔物体（ミサイル等）を空中上で爆発させ、艦体への直接攻撃を阻止するのだ。

式典が終わり、出航の時を待つ観客達が待つ中で、新城は降り始めた小雨から逃れようと甲板から艦内へと入ろうとした時だった。

「失礼ですが……」

背後から響く透き通った声を聴き、新城は振り返る。

そこには、細身で気品溢れる女性が1人、困り果てたような表情

を浮かべていた。女性は鮮やかな黒髪のロングヘアに漆黒のレディースーツ。殆ど化粧のされていないにも関わらず滑らかな肌カラーコンタクトによって彩色された藍色の瞳という風貌で、穏やかな表情は見る人全てに温かな感覚を思わせた。

「ここは立ち入り禁止区域ですよ」

新城が対応しようとする中、その女性は持っていたポーチから一枚の名刺を取り出し、新城の元へ掲げて言った。

「A新聞社の近藤です。今回の『きぼう』防衛任務取材班の……」

ああ……同行する記者か……。

噂程度に聞いていたその事を思い出し、途端にばつが悪くなった。何とも失礼な事をしてしまった……。

「失礼しました。どうぞこちらへ……」

新城は華麗に身を翻し、近藤を先導した。廊下を突き当たるまで進み、階段を下りて行く。そしてひたすら進み、居住区へと到達した。女性自衛官用の居住スペースは船とは思えない程清潔なものであり、やまとには20名程度の女性自衛官が乗艦している。荒木は区間の出入り口近くに居た女性自衛官を呼び止めて、近藤を任せた。

「ありがとうございます」

近藤はにこやかな表情を浮かべながら言った。

やまとが時折、轟きを上げる。

砲雷長である新城は、CIC内部で立ちながら、策敵レーダーや防衛用のカタクラフトシステムに異常が無いかを確認した。

「艦長入室！」

とつさに新城はきびすを返し、年配の男——やまと艦長の倉本一等海佐に敬礼した。

「楽にしたまえ」倉本艦長は右手を掲げ、敬礼する一同へと告げた。

新城は前に進み出て、口を開こうとしたが、倉本艦長は既に近く

まで接近しており、厳かな表情で新城の顔をよく見た。

「カタクラフト……システムはどうだね？」

「正常です。何も問題はありません」

倉本はしばしば考えてから、静かに頷いてから告げた。「三等海佐。長年私はこの海上自衛隊に勤めているが……未だに信じられんのだよ。つまり、“シールド”だ」

それは確かにそうだ。と新城もよく考えていた。ただ、科学が現実を凌駕する事はしばしば訪れており、SFチックな兵器が到来するのも現実的と言えば現実的であった。しかしながら、新城を始め乗員の大半はカタクラフトシステムについて想像も出来なかった。

「ともかく、『きぼつ』防衛任務は何が何でも完遂する」
無論、新城は頷いた。

その刹那の事。突然鋼の大地が震え出し、鈍い駆動音が足元より聴こえて来た。2人は顔を見合わせ、それがタービンによるものと気付いた。ついに稼動したのだ。

それから数分も経たない内、やまとはゆっくりと動き始めた。
プラズマ・モニターから横須賀の街々を一望する新城は、この時が訪れた事を感じていた。

『やまと』の出航。

それは——日本再生のスタートであった。

一章『没落』 1話 護衛艦やまと（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

2話 カタクラフトを創った男

やまと出航から4時間。式典の歓声と叱咤はもはや過去となり、横須賀の街々はその姿を完全に消していた。CICに居た艦長倉本一等海佐は一旦部屋を退室し、ある人物の待つ艦長室へと歩を進めた。

その人物は——カタクラフトシステムを造った男。
名をトマス＝藍畑。

日系アメリカ人である藍畑は、マサチューセッツ工科大学（MIT）出身。父親の開発したレーザードリルの最後の部分を完成させ、さらにその応用である全方位防衛シールド『カタクラフトシステム』を造り出している。

現在は帰化した為、れっきとした日本人となっており、メタンハイドレート採掘事業に大きく関わっている。海自上層部は国の決定により、藍畑を無事に施設へ送り届ける事こそが護衛艦やまとの最初の任務であるのだ。

普段の倉本一等海佐は、特に何も考える事無く艦長室へと入る。だが、今夜は窓から吹き荒れる暴風雨と轟く雷鳴。そして内部に居る人物に対して戦慄を覚えた。

「失礼します」

何とも不思議な気分を感じつつ、自室の扉をノックする。呆気無く開いた扉はさほど音も立てず、雷鳴から来る轟音に消し去られてしまった。恐る恐る中を覗くと、そこには1人の青年——が椅子に腰掛けていた。

倉本は分厚い本を読む青年の前を歩き戻りしつつ、考え込んでいた。彼が？。

「それで……貴方が倉本一等海佐？」

青年は特異な声色で言った。

「ええ……はい……そうですが……藍畑さんですよ」

倉本の当惑した表情を見て、青年は笑みを漏らした。座椅子に座りながら身をよじり、改めて倉本の顔を見据えた。

「お察しの通り、私が藍畑です。驚いたでしょう？」

「まあ……そうですね」

倉本が動揺しているのは、年齢というだけでは無い。青年の髪や皮膚は雪のように白く、青紫がかった瞳からは神秘さというものを感じられた。

「私はチエディアック・東症候群——という特異な病気を患ってましてね。合併症のせいで、世間一般に言う“アルビノ”のようにメラニン色素が欠乏しているんですよ」

藍畑はそう言い、満足げに微笑んだ。

「お会い出来て光栄です——」

「私が来たのは、挨拶というだけではありませんよ」

20代前後の幼さの残る藍畑はそう言いつつ、手を上げて倉本を止めた。

「警告をしに来たんですよ。じきに起こる北朝鮮との全面戦争をね」

全面戦争？何を言っているんだ……。

倉本は見えない話を聴き、宙に浮かぶかのような感覚に襲われた。途端に沈黙が走ったが、藍畑はすぐにその空気を言葉で切り裂いた。

「9年前の事件をご存知で？」

藍畑は言った。

「“きぼう事件”の事ですか？」

「そうです。あれが陰謀という意見を聞いた事は少しはあると思いますが、信じますか？」

「いえ……信じませんよ」

倉本はそう答え、背後で軋む扉の元へと歩み行り、ドアノブに手を掛けて開けた。

「今日はこれぐらいにしてくれませんか？」

「信じた方が言い。現実から目を反らしてはいけませんよ」

またか……。と倉本は心の中で呟いた。途方も無い作り話や昔話など聞かれては堪ったもんじゃなく、素早くこの時を終わらせようと行動に出たのだ。

「事件の真相は大きく違う。この物語は北朝鮮が起こした茶番です。奴らは作業員を送って施設を爆破し、設備を粉砕して日本に負債を負わせ、さらには日本が世界におけるメタンハイドレート事業の独占権を完全に崩壊させた。今やアメリカを始めとした国々は採掘して販売してますからね」

「じゃあテポドン3は？事件に関係があるとでも？」

倉本は、脳裏に浮かんだ過去のニュースを元に言った。

「そこが根幹なのです。あれは非常時に施設を粉砕する為の試射であつて、本当に無弾頭弾だった。VXガスは作業員が流したものであり、作業員を口封じさせたり工作活動を容易にする為にやった事なのです」

一旦間を開け、藍畑はまた話し始めた。

「原油枯渇の深刻化する今、メタンハイドレートの値は上がっています。南海トラフにおける埋蔵量から換算すれば推定5〜8兆円規模。石油の値が上がれば上がる程さらに上がる。一方、2030年代、北朝鮮には推定300億バレルの石油が埋蔵されており、環境保全の風潮が強まる中ではどうしても邪魔な存在になる。そこから北朝鮮は運用を阻止した……が、今やそんな北朝鮮でも原油は枯渇しつつある。貧乏国が資源まで失った場合、どうなると思います？」

「大した力説ですがね……」

「事実ですよ。そもそも、ただの採掘施設に海自の大艦隊が防衛に就く事自体おかしいと思いませんか？」

確かに……と倉本は思った。この艦艇数の数は、演習か他国の紛争に介入をするかと思われる程の規模であり、たかが採掘施設を守

る為の戦力としては不思議なものだ。

「北朝鮮の情報を事前に掴んだ政府の対応ですよ。北朝鮮は空挺部隊が何かで施設を掌握し、資源を自らの手にしようと目論んでいるのです」

「じゃあテポドン3は？何の為に発射したんです？」

「言ったでしょ？30年の事は試射。つまり……」

「まさか……そんな馬鹿な事を？」

大体の事を倉本は理解しつつあった。

「万が一、掌握に失敗した場合には——お分かりだと思いますが、戦術核兵器が何かで施設を粉碎するという緊急措置もありえるという所ですよ」

やまとの一角。

階段を足早に下りて来る音を聞いて、新城三等海佐は御来客の到来を知った。密閉空間の中、どこからともなく聴こえる換気音と、船底から響く原子炉の駆動音が空気を切り裂いた。

「遅れてすみません！」

唐突に階段から身を出して現れた新聞記者の近藤は、心苦しそうに言った。

「いえいえ、こちらこそ案内の仕方が悪かったようで……」

新城は言った。

「では、早速ですが『やまと』についての感想を……」

「とても光栄に思いますよ。快く思わない人も居るとは思いますが、海自には空母は必要だと思いますね」

「新城三等海佐。自衛隊は国を守るのであって侵略用の兵器である空母は要らないという意見も多いですが、それに関してはどう思いますか？」

近藤の言葉に、新城は少し考えた。

「対空防衛兵器は必ずしも完璧でない以上、陸上基地が万全とは

言えない。そう言った場合、敵の侵攻を受けた時の迅速な防衛策として空母は必要になると思うし、空母を使う事で侵略により素早く対応すればする程多くの命を救う事が出来ると私は考えています」

近藤はメモ用紙にペンで書き綴りながら、盛んに頷いていた。

「それにしてもよく降りますね」

近藤はそう言い、窓から望む豪雨と雷鳴を見据えた。確か台風12号が接近しているとは聞いていたけど……。その点を考えると、何とも変な感触を覚え、思い耽った。

2話 カタクラフトを創った男（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

3話 嵐の襲来

2039年5月29日pm22:04

『マリアナ沖で発生した台風12号は現在、勢力を保ったまま北上しており、今夜中には四国を通過するものとされております——』
小型のテレビに投影される天気予報を見つつ、航海長である井上三等海佐は艦長より打診されていた航路と台風の経路を見比べ、その安全性を確かめていた。全神経は海図と随時発信されているテレビ局の台風情報を映すテレビ画面に釘付けになっている。規模850キロ、最低気圧800ヘクトパスカル、最大瞬間風速90キロというとんでもない台風であり、たとえ『やまと』と言えども直撃を喰らえばただでは済まないだろう。

——心配ありません。と言いたかったが……もはや仕方無い。

テレビの電源を切り、海図を丸めて井上は立ち上がった。艦長倉本の居るCICへと入室し、背を向けている倉本の前へと歩み出て敬礼する。

「艦長。航路に関してですが……」

倉本はいぶかしげな視線を井上へと向けながら言った。

「大体の事は私にも分かる……。だが、命令である以上、防衛に就かねばなるまい」

「それは確かに正しいです。しかし、乗員の命を考えた場合は――」

倉本は静かに手を上げ、井上は口をつぐんだ。

「井上三等海佐。君の心意気には感服する。だが、時には危険を承知しながらも立ち向かわねばならない事もあるのだ」大きく息をつく。「何とか安全に航行出来る航路を検討してくれまいか？」

井上は呆然と海図を見返した。倉本一等海佐の物言いはとても厳かだった。

「失礼しました」
そう言い、井上はCICを後にした。

高知県室戸岬沖南東130キロ

メタンハイドレート資源開発コンソーシアム／海上掘削施設『きぼ』

施設内より発せられる黒煙は漆黒の空を浮標した後、吸い込まれてしまう。

『やまと』を始め、『ひゅうが』『こんごう』といった艦艇群は、鋼鉄製の人工島を取り囲むようにして停泊しており、防衛任務に就いている。

トマスⅡ藍煙は長い時間を掛けて外を眺め、時が来るのを待った。必ず奴らは現れる。自分の得た内部情報に反駁の余地は無い。運命というものが存在するのなら、変えられるはずだ。

「……御出ましかね」

『やまと』CIC

突如として鳴り響くアラーム音を聴き、砲雷長の新城は広域搜索レーダーに視線を合わせ、接近する飛翔物体の存在を確認した。

「対艦ミサイルの存在を確認。数は20！」

電測員長の横浜一等海曹は、半ば怒鳴り声に近い形で叫んだ。

「RAMで迎撃！対空戦闘用意！RAM発射用意！」

新城はそう指示し、他の友軍艦にも打電させた。周域に展開していた護衛艦の多くが嚴重警戒態勢に突入する。

「RAM発射用意よし！」

第1分隊の隊員がそう告げ、新城の目は外部を映すモニターに絞

られた。甲板上では、Mk・49発射機がその鋭い矛先を西へと向けた。

「てえー……ッ!!」

RAMは勢い良く飛び立ち、その翼を羽ばたかせる。

急接近していたP・15テルミートは銀色の体躯を震わせながら突き進む。

——RAMとP・15が、重なり合う。

三つの艦から放たれた総数50発のRAMはP・15の20発中18発を迎撃し、その内の2発も2次迎撃行動によって粉碎された。

何か嫌な予感がした。

あまりにも攻撃が甘過ぎだった。

砲雷長の新城は、違和感を胸の奥に覚えていた。

「エクセル1より入電。正体不明の航空機100機を求む……との事です」

横浜は言った。

「機種の確認を打電しろ」

「了解しました」

闇間から突然現れたその航空機は、高度600m地点を編隊で飛行している。E・2Cに搭乗していた隊員は、その信じられない光景を目の当たりにしてしまった。

「エクセル1より入電。機種は零式艦上戦闘機です」

……何かの冗談だろ？

新城は通信機より漏れるくぐもった音に耳を澄ましながら呟いた。30秒後、その冗談とも思える言葉は確信となり、やがて悲鳴が響いた。

前方に展開していた『ひゅうが』は突如として爆発し、黒煙と灰が空気を浮標した。

護衛艦ひゅうが。

その艦上には、想像を絶する数の零戦が飛来していた。全ての零戦はそのまま急降下を果たし、搭載された爆弾を持ってしてひゅうがに甚大なダメージを与え続けた。それは、朝鮮人民空軍版神風特攻隊による攻撃である。そして、そのすぐ前には40機近くの無人型F4Uが展開しており、ひゅうがから放たれる『ミサイル潰し』として機能させる事により、特攻本隊の特攻攻撃成功率を上昇させているのだ。

そのすぐ近くには、朝鮮人民海軍のロメオ級潜水艦が10隻程展開しており、その内爆弾を満載した2隻はこんごうに向かって直進する。

「エクセル1より入電。敵空母の存在を確認した」

ロシアの払い下げ品、空母アドミラル・クズネツォフからは多数の旧式戦闘機が順次発艦しており、その大半は無人型や志願者を乗せた特攻機が多数を占めていた。

「支援戦闘機の発艦用意！」

艦長倉本は言った。

台風は近付き、戦争は現実と化した。

——だが、それは再生の一片。
真の物語はここからだった。

3話 嵐の襲来（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

兵器紹介（前書き）

護衛艦やまについてですが、一章1話等で紹介した『原子力』は流石に無理があるので削除しています。

兵器紹介

▼やまと型護衛艦

- 艦級 -

○ 艦種 航空機搭載型護衛艦（DDA）

○ 艦名 『やまと』

○ 建造期間 2032年 - 2039年

○ 就役期間 2039年 - 就役中

○ 前級 かが級護衛艦（DDH）

- 性能 -

○ 排水量

基準 80000トン

満載 100000トン以上

○ 全長 330m

○ 全幅 42m

○ 機関 蒸気タービン（4基）

○ 速力 30ノット以上

○ 兵員 5000人

- 兵装 -

ファランクス 2基

RIM-116 2基

ESSM 2基

VLS 2基

- 艦載機 -

F-35C、F/A-18E/F、

E 2 - C、S H - 6 0 K、S H - 6 0 L
総数 8 0 機

- 特殊兵装 -
カタクラフトシステム

4話 衝撃と閃光

思い出はいつもここから始まる。

トマスⅡ 藍畑は燃える薪から漏れる音と香り、そして温かな炎のぬくもりを実感していた。フィラデルフィアの郊外に位置する別荘。その書斎で車椅子に座り、腕に点滴針を刺したままの老人の前に歩み寄り、藍畑は直立不動の体勢で立つ。

老人の華奢な腕は、大きな本棚に向けて指差した。

「……“時間順序保護仮説”？」

藍畑は革カバーの掛けられたその論文を一瞥し、不思議そうな表情を浮かべた。時間順序保護仮説とは、理論物理学者スティーブン・ホーキングが提唱した過去へのタイムトラベル否定説である。この説において、ホーキングは過去に行く為に必要となる閉じた時間線が存在するには、場のエネルギーが無限大に必要と唱えているのだ。

「これがカタクラフトシステムと何か関連があるんですか？」

「大有りだ。カタクラフトの次元枠は通常世界とは異なっている。内部に停滞するエネルギーは限り無く無限に近く、外部世界からの大きな干渉を受ければ次元枠が崩壊……いや、裂けるかも知れんだ」

老人は車椅子に寄り掛かり、右脇に置いていた一通のファイルを示した。

「私の意志を継げ、息子よ。無限の可能性を引き出し、真の祖国を救うのだ」

一瞬の事だった。

藍畑は現実へと引き戻され、回想の日、2032年から朝鮮人民空軍の零戦が飛来する2039年へと舞い戻った。最新鋭の護衛艦がことごとく撃沈されて行く姿は、見るに堪えない光景だった。そろそろかな……。

藍畑は右手を大きく掲げ、フィンガースナップを立てる。

刹那、親指と中指の間から空気を切り裂く破裂音が響くと、甲板
上からその変化が垣間見れるようになる。突然、海上掘削施設『き
ぼう』の周りに青色の壁が海面から姿を覗かせ、天まで昇って行く。
そして、きぼうの周りを囲んでいるその壁は施設頭上で連結すると、
その真の姿が露となる。

『やまと』CIC

砲雷長として陣頭指揮を執っていた新城三等海佐は、モニター越
しに映る信じられない光景を目の当たりにしていた。突如としてき
ぼう周域を取り囲む円形の青壁は、どこかに見た事のある光景だっ
た。

「カタクラフト……なのか？」

艦長の倉本一等海佐は、目を大きく見開いた。

「艦長、お電話です」

背後から歩み寄ってきた横浜一等海曹は、白色の受話器を倉本へ
と手渡した。

「もしもし？」

「私の事は分かるか？」

凄みの効いたその声色は、過去に数度聞き覚えがあるものであり、
倉本は一瞬震え上がった。

「島崎海上幕僚長……お久しぶりです」

倉本は視線を周りにちらつかせながら言った。

「残念だが、北朝鮮の弾道ミサイルを日本海で防ぐ事が出来なか
った。諸君等はその場を即時撤退し、安全圏まで避難してくれ」

弾道ミサイルなんて初耳だ……。

倉本は胸騒ぎを覚え、再度確認した。

「本当ですか？何故北朝鮮がそんな事を……」

「質問に答える事は出来ない。武運を祈る」

そう言つと、唐突にも電話回線は切断されてしまった。僅かな沈
黙がCICを包み込んだが、倉本はすぐにその場を払拭した。

「支援戦闘機発艦準備中止！繰り返す発艦準備中止！カタクラフトシステムを起動しろ！」

やまとを包み込む青き球体。

全方位防衛シールドシステム『カタクラフト』は、実戦で初となる起動を果たした。

機関室で指揮を執る機関長の長和三等海佐は、背後で唸る蒸気タービンエンジンの振動に身を揺らされつつ、電気能率に異常が無いかを確かめていた。カタクラフトシステム最大の弱点と言えば、対象防衛物の大部分に電力が行きとどっていないとはならないという所だ。その為、シールド形成の際には膨大な電力を必要とするので、ショート等の事故は決して起こしてはならない。

「問題は無いな？」

長和は部下の隊員に言った。

「ええ、電力供給は順調に稼動していますので大丈夫——」

隊員の言葉は謎の衝撃によって遮られ、長和は思わず体勢を崩して後ろに倒れ込んだ。そのすぐ後に不気味な物音が響き、2人は顔を見合わせた。

数分前、CICでは、艦長倉本がモニターから形成されたシールドを見据えていた。その横では、既に完全形成の成し遂げられている『きぼう』が多数の残片をシールドによって遮断している。そして、水平線の遥か彼方から眩い光が漏れ出していた。

嵐の中で漏れるその光は、煌々と輝いていたが、同時に不気味だった。

それから30秒後、測定器が異常なエネルギー反応を示し、けたましい警告音がCICに鳴り響く。測定器に示された座標。やまとより東に20キロ地点という所から、『きぼう』防衛戦力の補強隊に対する攻撃だろうと倉本は予測した。

「衝撃に備えろ！」

CIC内部に居た人間は全員姿勢を低くして突っ伏し、何か重そうなものにしがみつく。推定1メガトンと思われる核爆発は、17キロ圏内に激しい爆風を吹き散らし、台風と重なって激しい風圧となり、まるで壁のようにやまとへと向かっていた。

雷鳴の数が増え、風は強まる。爆風の風速は既に100mを上回っていた。

風壁は怒涛の如く迫り、そして——直撃した。

爆発範囲からかなり離れていたせい、思った程の衝撃を新城は感じなかったが、そんな事を払拭するような、目を疑うものがモニターに映っていた。

それは閃光。

重なるかの如く飛来した雷は激しい閃光を迸らせ、モニター全体を光に包んだ。

そして——暗黒。

4話 衝撃と閃光（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

二章『時間旅行』 5話 大和

唐突に訪れた静寂の中、新城三等海佐は鼓動を始めた心臓に手を添え、吐息を漏らしながらゆっくりと目を開けた。CICは不気味な程穏やかで、地面には自分と同じように人が倒れている。

じつと視線を床に向けていると、呻き声が徐々に聴こえ、艦長倉本を始め一同は深い眠りから目を覚ました。

「……これは一体どういうことだ？」

倉本一等海佐は最初に起き上がったいた新城に尋ねた。しかしながら、自身も訳の分からない新城はこうべを垂れ、かぶりを振って返答した。

何時間経った？

頭を擦り、倉本は腕時計に目をやった。

——Am05:08。

倉本は振り返り、困惑しながら新城を見据えた。もう朝か……。生きているとは奇跡だな……。この数時間の間に起こった現状を思えば、そう考えるのは何ら不思議ではなかった。

「新城三等海佐。これを見てくれませんか」

混乱している倉本の横をすり抜けて、横浜一等海曹の元へと歩み寄る。

「何かあったか？」

新城は訊いた。

「GPS受信機が故障したのか……動かないんです」

そんな馬鹿な。と新城は胸の中で叫んだ。GPSは船舶においては非常に重要な意義を持つ。数時間もの間気絶していたとなれば、GPS無しでは自艦が何処に居るかを特定するのも難しいだろう。

「電源が落ちているんじゃないのか？」

「私も始めはそう思っただんですが……機器自体に異常が無いのと、これを見れば……」

横浜はそう言うと、右手を掲げて光源を放つプラズマ・モニターを指差した。

「すみません……私のミスです」

横浜はそう言い、机に置かれた瓶底眼鏡を掛け直した。

「いや、君のせいじゃない。気にしないでいいから機器の復旧を進めてくれ」

とはいえ、この数時間の光景を考えると最悪の状況だった。北朝鮮が侵攻を開始し、見聞きした内容を思えば、本土がどうなっているても不思議では無かった。新城は視線を上げて、気絶前に眩い閃光を見たプラズマ・モニターへと目を向けた。

霧……。

昨日の豪雨が嘘のように、温かな光が差し込む濃霧がモニター全面に映り込んでいた。何故かは分からないが、モニターを映すカメラが何らかの衝撃で小刻みに揺れている。

突如、濃霧から巨大な角のようなものが姿を現した。

モニター越しに映るその物体は、霧によって強調された巨大な輪郭から船舶の船首のようで、その大きさを考えると大型タンカーか何かのようだ。

「新城二等海佐！」

突然背後から響き渡る横浜の叫び声を聞き、新城は後ろを振り向いた。

「……これを見てくれませんか？」

愕然とする横浜の指差す先を見ると、そこには一つのレーダー画面が映り込んでいた。画面には複数の連なる船舶——恐らく艦隊が映っている。

「すぐ第5分隊に連絡してくれ。哨戒へりを送って正体不明船舶を確認するようにと」

『やまと』甲板。

飛行科員の三吉三等海尉は、暖機運転中のSH-60K哨戒ヘリコプターに7.62mm機銃を載せていた。徐々に轟きが増していく回転翼は濃霧を切り裂く。

「準備完了だ！」

三吉は最高速に到達した回転翼から響く轟音に負けない声で言った。

重厚な体躯が空へと舞う。

三吉を乗せたSH-60Kは甲板上から空へと飛び立ち、正体不明の船舶に向けて針路を取った。予想以上のスピードで飛ぶSH-60Kは、少し進んだ所で水平に復し、左舷より垣間見える巨大な船舶に大きく目を見開いた。

「もう少し近付いてくれないか？」

三吉はパイロットに向かって言った。SH-60Kは高度を下げ、少しずつ左へと寄っていく。ある程度の距離まで到達した所で、機体は水平に復した。

三吉はその船舶の形状から、恐らくそれが軍艦か何かである事が分かった。

そこから、三吉はおもむろに座席に置いてあったデジタルカメラを手に取り、船舶全体が入るようにシャッターを切った。

『こちらブラックジャック1。不審船の撮影に成功した』

通信機越しに響くパイロットの音声を聞き、横浜一等海曹は新城に顔を向けた。

「艦長。ブラックジャック1より入電。不審船の撮影に成功したとの事です」

倉本は静かに頷いた。「海上保安庁への連絡はどうなっている？」

「連絡は付いていません……恐らく接続回線自体が遮断されているのかと」

どうすればいい？あくまでも領海侵犯を行った不審船への対応は海上保安庁の管轄であり、海上自衛隊は臨検が出来ない。

「続けて監視を続け、海上保安庁との連絡を続けてくれ」

SH-60K機内。

不審船周域を旋回する中、遂に事件が起こった。

三吉三等海尉が双眼鏡越しに船舶を見てみると、不意にその視界に銃器を持った男――が姿を現したのだ。三吉は眉間を顰め、パイロットに告げた。

「銃を持った人間を確認。すぐに報告――」

刹那、機体左舷後方に爆煙が迸り、テールローターに衝撃が走る。

「何だ!？」

三吉は回転翼の轟音に抗いながら叫んだ。不審船の甲板上を慌てて見ると、そこには対空火砲と思われるものを使用し、当機を撃墜しようとする人間達の姿が見えており、不気味なサイレン音が船舶から鳴り響いていた。

「離脱するぞ!」

パイロットは叫び、SH-60Kは大きく旋回し、急速離脱を始めた。

SH-60Kが轟音と衝撃を立てて離脱する中、背後では対空火砲の爆音が連続して鳴り響いていた。

「ブラックジャック1より入電!不審船より対空攻撃」

横浜の予想外の発言に、倉本は困惑した表情を浮かべた。

「哨戒ヘリを収納。LRADでの威嚇攻撃を開始」

数分後、逃げ帰ってきたSH-60Kが着陸態勢を進める中、甲板上ではLRAD――長距離音響装置の初運用が開始されようとしていた。直径80センチの四角形のその物体は、指向性音波を照射する事により、武装兵や暴徒鎮圧を果たす。

2つのLRADは船舶に向きを構え、照射準備を始めた。

「LRAD準備完了!」

電測員の声が響き、倉本はゆっくりと目を開けた。

「照射開始！」

その30秒後、LRADは強力な指向性音波を不審船に向けて照射した。前方にのみ音波が照射される為、後方や左右に居た隊員達は全く顔色を変えず、右舷を航行する不審船を凝視した。

LRADが音波を発する中、倉本は随時海上保安庁への通信を試みていた。

「どうだ？繋がったか？」

「いえ、接続は切れているままです」

電測員長の横浜一等海曹は言った。

「それよりも重大な案件について報告があります」
重要な案件？何の事だ？

倉本は首をかしげながら言った。「案件というのは？」

「第2分隊の航海科からの報告です。不審船艦首に菊の紋章を確認出来ると」

「本当か？」

「はい、濃霧から分かりにくい為、不特定ですが……その船舶は『大和』との事です」

倉本は愕然とし、モニターへと視線を向けた。そこには世界最大と呼ばれた戦艦——大和が確かに映っていたのだ。

「連絡を取ってくれ。“我々に交戦の意は無い”と」

倉本の言葉を聞き、横浜は頷いた。

二章『時間旅行』 5話 大和（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

6話 接触

1942年5月30日Am8:21

愛媛県豊後水道

1941年12月6日に就役した大日本帝国海軍の戦艦『大和』は、史上最高の大きさを誇る巨艦大砲主義の象徴的存在として、戦争終結まで丁重に扱われていた。最期は半ば敗戦を覚悟しながらも挑む特効的作戦に編入され、戦艦史上稀に見る悲惨な結末を迎えている。

大和艦橋。

連合艦隊司令長官、山本五十六は耳を劈く不気味な音波に苛まれ、思わず両手で耳を塞いだ。隣に居た参謀長や艦長高柳も同様の行動に走る。

「米軍の新兵器か!？」

山本長官は喘ぐような声で叫んだ。

濃霧の中という事もあり、その兵器の正体は分からず、より恐怖心を駆り立てた。

「閣下!ご退室を……」

高柳艦長が山本を避難させようとした時、不意に音波は消えた。

やまとに搭載されている新型を始め、LRADの連続使用は世界各国で制約されている。開発メーカー側も数秒間の使用に限定するようにと伝えている。

「敵艦の位置は把握出来たか？」

山本は両手を耳から離し、砲術長に訊いた。

「濃霧が強過ぎて視認困難ですが、何とか確認出来ます」

「よし……砲撃用意——」

刹那、慌てた様子でやって来た通信長が山本の声を遮り、素早く

敬礼した。

「閣下、敵艦より光通信がありました」

「……何と言ってる？」

山本はいぶかしげな表情を浮かべ、訊いた。

「“当艦『やまと』は貴艦との戦闘を望まず、即時交渉に移行したい……”との事です」

何故大和という名前を？

大和は設計者始め、建造従事者にも伝えられず、徹底した環境の中で就役した。国外はおろか国内でもその名はあまり知られていない。

「所属国は何処か言っているか？」

山本は訊いた。

「日本です」

「大日本帝国ではなく？」

「はつきり日本と……。後、海上自衛隊という組織との事で、意味の分からない事が多い。まるで悪夢だな。」

先刻、大和周域を飛行していた謎の航空機と言い、音波攻撃と言い、未知の部分が多過ぎだ。と山本は心の中で呟いた。

「乗艦許可を求めていますか……」

通信長は恐る恐るながらも、山本長官に伝えた。

「……許可しよう」

『やまと』甲板より飛び立ったSH-60Kには、艦長倉本と戦史に長けた飛行長の西村一等海尉。さらに不審船として大和撮影兼監視を担っていた三吉三等海尉も同行する。

艦長不在のやまとの指揮を執るのは、砲雷長と同時に副長も兼任している新城三等海佐である。

バックアップとしては、横浜一等海曹が随時通信を受け、整理された情報を伝える。

戦艦大和の後部甲板へ爆風を上げながら着陸するSH-60Kは、瞬時に兵士達に取り囲まれて、九九式短小銃の鋭い銃口を差し付けられた。

「貴殿が軍使か？」

取り囲む兵士の中を潜り抜け、高柳艦長が姿を現した。

「私はやまと艦長の倉本一等海佐です」

「そうか……私も艦長だ」

高柳は辛辣な視線を倉本に向けて、拳銃の銃口を上へと掲げた。

——唐突に訪れる静寂。

にわかに背後の兵士達から鈍い金属音が響き始め、やまと乗員達は静かに動揺を感じた。その一瞬、三吉三等海尉は右足を前に踏み出し、両者の間へと入り込もうとする。

「……それぐらいでいいだろ」

場の空気を変えるその声は極々近くから響き、大和兵士達は動揺した。

煌々と輝く軍帽。そして鋭い眼光で辺りを見渡すその男は、高柳の肩に手を添えて、瞬時になだめた。

「山本五十六……」

西村一等海尉は静寂の中、呟いた。

白を基調とする軍服に身を包む高柳。

白を基調とする軍服に身を包む倉本。

その両者を寸断する男——山本。

後部甲板の一騒動は呆気無く終結し、倉本達は長官室へと招かれた。艦内の整った通路もそうだが、大和は戦艦とは思えない程清潔に行きとどっており、室内は壮麗な造りに洒落たオーク材の椅子と机。そして色あせた地球儀が1つ置かれていた。

「山本五十六大将です。貴殿は艦長……と言っていましたな」

「ええ。私は一等海佐です……」

山本は訊いた。「一等海佐？」

「我々の所属する海上自衛隊での……海軍大佐にあたる階級です」
倉本の説明を聞き、山本は静かに頷いた。なるほど。その海上自衛隊という組織での階級か……。何とか組織の全容を聞きだすしかないまい。

「で……貴殿らは何処に属している？」

山本の言葉に、倉本は少し考えた。果たして本当に未来人と伝えるべきなのか……。

一時間前、ＣＩＣで行われた議論の結果として、自身らがタイムスリップしているという事になった。しかしながら、そんな事を信じない者も多く、倉本艦長もその１人だった。結果、今だに倉本は過去に到達したという現実には半信半疑であり、そもそもここが本当に過去なのかも疑わしかった。

「未来の日本……といったらどうしますか？」

高柳はとつさに軍刀へと手を置いたが、山本は手を上げて静止した。

「ご無礼とは存じますが、我々にも分からないのです」

「望んで此処に来たと言う訳では無い……ということだな？」

倉本は静かに頷いて答えた。

「どうしたい？」

山本の問いに、倉本は思わずこうべを垂れ、考えた。本当にこれで正しいのだろうか？。もっと他に方法もあるはずじゃないだろうか？。

「私には乗員５０００人の命が掛かっています。ぜひ、物資支援を依頼したいのです」

倉本の言葉に、山本始め一同は顔を強張らせた。

「もし未来から来たのなら分かるはずだが……大日本帝国は資源が乏しい小国だ。認めるのは悔しいがな」

倉本は承知の上、あの事実を言うしか無かった。

「分かっています。日本はそれが原因で……」

言葉を詰まらせ、山本がいぶかしげな表情を浮かべ始める。

「何がある？」

「……戦争に敗北します」

一瞬、室内に強張った空気が張り詰め、高柳と山本の顔がにわかに顰めしくなった。不沈艦大和の中ともなれば、なおさらだ。山本の目は恐怖と疑惑によって、大きく見開かれた。

「閣下、今すぐ奴らの拘束を……」

山本は意気消沈しつつ、憤りを覚える高柳らを手を上げて抑えた。
「その根拠を教えてはくれまいか？」

倉本は静かに数百枚の用紙を提出した。

1つは朝雲新聞社より刊行された『戦史叢書』のプリントアウト。真珠湾攻撃から終戦までが鮮明に描かれており、外部には漏れていないはずの機密情報等も幾つか書かれていた。また、昭和天皇とマッカーサーのツーショット写真や、広島・長崎の白黒原爆写真。どれも目を疑うものであった。

「分かりましたか？」

倉本の問いに対し、山本は静かに頷いた。

「認めるしかない……」

「では……」

「分かっている。支援の検討を上申しよう……我々に同行するのならな」

山本の顔は真剣そのものだった。戦史叢書第43巻『ミッドウェー海戦』を見た為だった。また、ミッドウェーの作戦が米軍側に筒抜けである事も明らかに、未来艦『やまと』の協力次第では軽微な損失で作戦遂行が可能ではないかと考えたからだ。

「同行……ですか」

「そうだ。部下の命を救いたいのだろう？」

倉本は同行には否定的だった。山本長官の言葉は正しいが、戦闘で死んでは元も子も無い。

「しかし……」

渋る倉本に、山本は少なからず苛立ちを感じていた。が、日本の末路を考えればそんな事は微々たるものであり、悲惨な結末は何としても変更しなければならぬ。

「貴殿が自ら乗艦したのは、あの誤射の為だろ？ここで反するのなら貴艦もろとも沈没させるしか手段は無いぞ。我々は既に情報を手に入れたのだから」

それが間違った選択であるのは違いなかったが、彼らの心境を考えれば過去の——自分達を生んだ国の——そこに住み、忠義を果たす人間に攻撃を仕掛けるとは考えにくかった。それこそ大きなタイムパラドックスを生んでしまう。

「……分かりました。同行します」

山本と倉本は立ち上がり、互いに握手し合った。

そして、一同は簡素な敬礼を果たし、会談は幕を閉じた。

6 話 接触（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

三章『ミッドウェー』 7話 第二次K作戦

1942年6月3日 pm 20:05

ミッドウェー島北東沖

アメリカ合衆国のハワイ州ミッドウェー島には、レイモンド・スブルーアンス少将率いる第16任務部隊はフランク・J・フレッチャー少将率いる第17任務部隊と合流し、即応態勢を敷いていた。その中には、空母エンタープライズ、ホーネット、そしてヨークタウンが一同に集い、周囲には駆逐艦群が陣形を組み、守りを固めていた。

その上空、漆黒に染まった大空には、1機のE2-Cと2機のF35Cが隊列を組んで飛行している。

F35Cは高いステルス性を備えた次世代戦闘機であり、そのステルス性能は海軍機内ではトップクラスである。今回はE2-Cの護衛と敵艦駆逐を担う。

F35のパイロット、海上自衛隊初の支援戦闘機員として高度な教育を受けた河合昭一 等海尉は冷たい夜気に包まれながら、眼下に映る光景を未だ信じられずにいた。島から昇るちっぼけなサーチライトと艦艇を照らす光源によって米海軍の聖域が露になる。

「間もなく目標ポイントに到達。空域をカバーする」

ヘッドマウントディスプレイ越しに声を響かせた後、タッチパネル式液晶ディスプレイに指を添え、情報を検索する。

「アレス1よりエクセル2。探査出来たか？」

『こちらエクセル2。敵艦隊の座標を送信する』

点滅する液晶ディスプレイには、友軍のE2-Cより送信されて来た敵艦隊の座標が表示されていた。

『ヤマト・コントロールよりアレス1。LJDAMによる対艦攻

撃を開始せよ』

「アレス1。ラジャー（了解）」

川原は座席右側のサイドスティックを握り締め、一気に降下させる。その前方には米海軍の空母『ヨークタウン』が広がっており、月明りによって影が海面上に大きく伸びていた。

機首下部のEOTSが起動音を立てる。

電子・光学式照準システムであるEOTSは赤外線を用いた誘導レーザーを照射する攻撃センサーであり、GPSが使えないLJDAMもレーザー照射を直接的に行う事で精度は落ちるものの、問題は無い。

「アレス1。コンタクト」

「アレス2。コンタクト」

2機のF35から、合計4発のLJDAMが放たれ、赤外線レーザーに沿うようにして落下する。

——轟音。そして爆炎。

液晶ディスプレイに表示されていた目標が1つ消え、同時にアラーム音が鳴り響く。海上からは攻撃を受けて即応態勢を取っていたF4F戦闘機12機が飛び立ち、サーチライトの矛先が漆黒の空へと向けられた。

「アレス1・2。よくやった」

CICオペレーターの喜ばしい声を聞き、河合は静かにガッツポーズを示した。

「アレス1。攻撃完了——帰艦する」

河合は操縦桿を大きく右へと傾け、旋回して帰路へと就いた。

『やまと』前甲板。

ランディングギアを降ろしたF35Cは滑走路を低空飛行し、アレスティング・フックをアレスティング・ワイヤーに引っ掛けて着艦した。金属の擦れる音を立てながら着艦したF35Cのコック

ピットから河合がおもむろに顔を出すと、甲板上に歓声がかしました。

それは、やまと乗員の多くが初の過去に対する軍事参入行動の成功を賞賛し、新たなる一步を踏み出した歴史の証人になった為だった。

拍手と歓声に包まれる甲板上を歩く河合としては、喜ばしい事ではなかった。

あの攻撃によって同盟国——であった国の兵士が少なくとも2、300人以上は死んでいるはずだからだ。攻撃の主となるのは艦の再起不能で、動力源の蒸気タービン4基中3基は攻撃によって消滅した。

そして、あくまでもこの攻撃は敵に対する脅威性を示し、作戦中止を示すものである。

「河合、よくやったな」

背後から響くその声は、アレス2として作戦に参加した美浦舞一等海尉である。

「ああ……これで戦闘が始まらなければいいが……」

河合は深刻そうな表情を浮かべながら言った。

「心配？」

「今夜はうなされそうだ……」

河合は額に右手を添えて、項垂れた。頭痛と同時に吐き気が身体を襲い、喉に苦いものがこみあげてきた。

「私も……でもここまで来たら後戻り出来ないでしょう？」

美浦は不安げな表情を浮かべながら言った。

「そうだ……もう後戻りは出来ない。手は血で染まった」

『やまと』CIC

プラズマ・モニターより漏れる光を受けて、新城三等海佐は目を瞬かせる。

「艦長。報告によると米海軍機動部隊は撤退を開始したと……」
新城の報告を受け、倉本一等海佐は安堵の溜め息を付いて頷いた。
これで少しは時間稼ぎ出来るかもしれないな……。

例え乗員の命は掛かっているとは言え、人の命を犠牲にするのは
自衛隊の意に反する。敵対関係とはいえ、結果的には同盟国の空母
を攻撃したとなれば、大日本帝国の隷下に入ったも同じだ。

やまと内部でもその考えは大きく分かれ始めた。

艦長倉本、副長新城、電測員長横浜らを中心とした歴史改変否定
派。そして、飛行長西村や飛行科員三吉を含めた歴史改変肯定派で
ある。

艦内においては、肯定派層の方が多い。

こうして、海上自衛隊による『第二次K作戦』は偵察を兼ねた武
力威圧作戦として、大いに成功して幕を閉じた。

三章『ミッドウエー』 7話 第二次K作戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

8話 異変

ジャーナリストとして、近藤は現実とかけ離れた現状を記録し続けていた。自分は歴史の記憶者として全ての状況を書き綴り、写真に収める必要性がある。その考えは一晩中変わらなかった。

近藤と新城は今、再度取材を行う為に艦長らの指示に従って、『やまと』甲板上に出て晴れ渡る青空に視線を向けた。やがて、雲間から太陽の曙光が漏れ出し、温もりが肌を伝う。

そこはミッドウェー沖の海上。新奇とも思える山本主力艦隊の戦艦『大和』が視界にあった。煙突より鳴り響く轟音には常に驚かされる。

「新城三等海佐。戦闘行為に否定的なんですね」

頭上の空を1機の哨戒ヘリコプターが飛び、言葉は途中で掻き消された。

「誰にも考えはあるでしょう？」

「その考えが歴史の否定なんですね」

近藤はメモ用紙に発言を書き綴り、頷きながら言った。

「私は何も歴史を変える事を否定してる訳じゃない……。物事は慎重に進めていかないと取り返しのつかない事になる」

新城は甲板へと指を差しながら言った。

「でもあれを見たんじゃない……」近藤は不安げな表情を浮かべ、脳裏に嫌な記憶が蘇ってきた。タイムスリップ直前の衝撃波と閃光だ。その光景は写真のように鮮明に記憶の中に残っている。

「貴方は何故此处に？」

新城は辛辣な視線を近藤に向けて言った。

「『きぼつ』の取材ですよ。10年前の真相を突き止めたかったです」

「10年前？」

「きぼつ事件には幾つかの証言があります。韓国人らしき男が何

か不審な行動をしていたという事です。新聞社に入ってすぐ担当に入れられたのがこの事件なんで強い思い出なんです」

近藤は虚ろな視線を浮かべながら言った。

「……大和には祖父が乗っているんです」

唐突に口を開いた新城の発言に、近藤の視線はすぐに焦点が合わさった。……一体何の話？。

「大和の最期を生き残った乗員の1人でしてね。もし私と会ったらどう思いますか？」

新城は間を開けて続ける。「戦争によって本来の人生から代わる人間もいる。私念を持ち込むのは自衛官としてはどうかと思いますかね……」

「でも、日本が勝てば多くの人命が助かると思いませんか？」

「分かっています。だから私も出来れば早期講和を実現したい……だが、それによって出る犠牲もある」

緩やかな動きで体の向きを変えつつ、新城は虚ろな視線を戻した。普段覚えない不安と……畏怖を感じられずにはいられず、体をすくめて紺碧の海洋を見つめた。

艦長室。

革椅子に腰を埋める倉本は両手に銀色のアタッシューケースを持つトマスⅡ藍畑の顔を信じられないような表情で見据え、目を大きく見開いていた。

純白の髪は漆黒に染まり、青紫の瞳はカラーコンタクトで黒色化している。そして、蒼白の肌は化粧道具によって何とか隠されているようだ。

「一体何の用で？」

倉本の動揺する視線を見て、藍畑は凄みの効いた笑みを浮かべる。

「私は本日付けでこの艦を退艦します」

退艦？倉本は一瞬動揺を覚え、嫌な感触を覚えた。

「何処に行く気なんです？」

倉本は身を硬くし、眼を丸くしながら言った。過去の世界を放浪するのは自殺行為に等しい。

「満州…… 関東軍防疫給水部本部に」

関東軍防疫給水部本部——通称『731部隊』は感染症予防といった給水体制を整える為の研究機関であり、当時としては非常に重宝される組織であった。しかし、同時に細菌兵器を開発しているという黒い噂も流れており、しばしば人体実験が行われているという。そんな機関に藍畑が向かう事になったのは、前日に大和へと乗艦した際、未来技術の提供を条件に731部隊へと加えて欲しいという事を山本長官に独断交渉を果たした結果である。チエディアック・東症候群を患う藍畑にとって、感染症に掛かった場合には命を落とす可能性があり、未来の医療技術を学んでいた藍畑は自身で抗生物質を開発するべく、当時としては資金も機材も整った731部隊へと向かおうと考え、今それを遂行する。

「この容姿も偏見を思われにくいようにですよ」

藍畑は自身の髪や肌を指差しながら言った。

「本当に1人で？」

倉本は信じられない表層で訊いた。その実行力には感心するが、いささか危険だ。

「そこに行くのは単に自分の為だけではなく、未来を変える為に行くんです」

「未来…… 一体どうやって？」

倉本は目を丸くして訊いた。

「物事は偶然の積み重ねで生まれる。偶然その親の元に生まれ、偶然出会った人間と親しくなり、偶然を積み重ねて人生は最期を迎える……。つまり、過程の偶然を抹消するか変更すれば、未来は変えられる」

「なるほど……」

「例えばあなた方が居ても、未来を改変するのは難しいでしょう。」

でも、1つの大きな悩みの種を消せば、恐らく上手くいくでしょうね」

藍畑の言葉に対し、倉本は疑念を覚えた。

「悩みの種？」

「いずれ分かりますよ……」

1942年6月5日Am07:52

ハワイ州オアフ島。

曳船によって引かれてきた空母『ヨークタウン』は甲板半分が陥没し、3基の蒸気タービンが機能していない状態であり、絶えず黒煙を噴き出していて空は煙に覆われていた。真珠湾へと差し掛かり、艦艇の多くが道を空けた。

フレッチャー少将は攻撃から負傷し、ハワイの病院へと運ばれており、艦とはほぼ同じ運命を辿っている。

NACA——国家航空宇宙諮問委員会のルイス・オルグレンは直感が波のように押し寄せ、海軍工廠の中で大破したヨークタウンの巨軀に目を瞠った。大きく湾曲した甲板と半焼し、黒焦化した装甲板は今まで見てきた日本爆撃機による攻撃とはあまりにも勝手が違っており、妙な胸騒ぎすら覚えさせた。

「……新兵器は高い威力のようだな」

オルグレンは崩壊した甲板を見ながら言った。

1年前の真珠湾の場面が目には浮かび、オルグレンは唇を窄めた。あの日、米軍は日本の航空技術を痛感していたが、その教訓は覚えなかったらしい。

「ミスター・オルグレン」

不意に背後より響く声を聞き、振り返ると白色の軍服に身を包む1人の男が立っていた。横には看護婦が1人、直立不動の体勢で男に万が一の事があった場合に備えている。

「ハルゼー中将」

ウィリアム・ハルゼーに向かい、オルグレンは軽く敬礼をして見せた。NACAは軍の管轄にも入った組織であるというのもあったが、それ以上に過去、オルグレンが第一次大戦に少尉として、ハルゼーが艦長の駆逐艦『ベンハム』に乗艦していた時期があるというのが理由だった。

「早々に空母一隻を大破されるとは……ジャップもやるもんだよ」
ハルゼーは穏やかだが力強い声で言った。

「過小評価し過ぎなんです。我々が」

「まあ……それなら上手くキングに言い逃れ出来そうだな」

ハルゼーは思わず笑みを漏らしながら、軽くウインクをして見せた。

「委員会には何という気だ？」

「残骸の中にある破片は未知の物だから……やはり新兵器として済ませるしかないでしょうね」

オルグレンは甲板に落ちている金属片の1つを手に取り、それをハルゼーの眼前へと掲げた。

「報告によれば、敵影はレーダーに映らず、見えなかったそうです」

オルグレンの報告に関しては、ハルゼーも周知している。その事から戦略爆撃機か何かによる爆撃であると推定出来たようだが、その機影が映らないというのは疑問を覚えさせた。

8話 異変（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

9話 ミッドウェー島襲撃

1942年6月5日 Am 03:30

ミッドウェー島北西

ミッドウェーの長い1日が始まった。

夜も明けきらぬ内、南雲機動艦隊の空母4艦より発進した第一次攻撃隊（零戦36機、九九式艦爆36機、九七艦攻36機）計108機。策敵機4機もやや遅れて発進する。

ヨークタウン損失後、日本軍は米側に降伏を促す文を空中投下したが、フレッチャー少将に代わって全権を委任されたスプルーアンスは機動艦隊を再編し、強固な防衛線を形成して戦いに望もうとしていた。

108機の攻撃隊を指揮するのは友永丈市大尉。そして、その中には海上自衛隊のF35飛行隊も含まれている。

ほんの少し前、甲板上に居た新城は多数のレシプロ機が飛龍や加賀といった空母から飛び立つ姿を目撃し、目を丸くしていた。影の落ちた海面上に浮かぶ空母群の多くは夜間同様の視界の悪さの中、レシプロ機独特のエンジン駆動音を響かせ、目的地へ向かおうとしている。

攻撃隊は島北西240哩より飛び、6時頃には島への空爆を開始してミッドウェーの基地航空隊を再起不能にして、航空支援を受けられないようにしようと模索しているようだ。

新城は今だ軍事介入に否定的な立場を取っていたが、私的な感情を持ち込む事を止め、指示に従う事にした。『やまと』乗員の多くも最初は困り果てていた。少なくとも、初めのうちは。ところが、今になって乗員達は歴史改変に意欲を示し、その真意を理解したらしい。

「……こうなっては仕方無いか」

新城は出し抜けに言い、CICへと舞い戻った。

入室したCICへ不意に、電子ロック式ドアの開閉音がして、それが開くのが分かった。艦長倉本の入室とともに、新城始め一同は敬礼する。

「支援戦闘機の発艦準備。第一次攻撃隊を支援する」

第一次攻撃隊を待ち構えていたのは、F2AバッファローとF4Fワイルドキャット計24機。暗号解読に成功していた彼等は迎撃出来る手筈になっていたが、どうやら状況が一変したようだ。

唐突に空の彼方から現れたのは白い戦闘機。日本機独特の深緑色とは訳が違った。

「アレス1、コンタクト」

河合一等海尉はヘッドマウントディスプレイ越しに告げた。液晶ディスプレイには編隊飛行で飛行するF2Aバッファローが映りこんでいた。

『……こちらヤマト・コントロール。交戦許可』

「Wilco（了解、命令実行）」

機首に独特の機械音が響き、特殊な銃器が露出する。

通称『ABL』。機上搭載レーザーは指向性エネルギー兵器として、F35に搭載されている。燃料タンク破壊やエンジンをピンポイント攻撃で破壊し、停止させて飛行不能に陥らせるという脅威の兵器である。

「FOX4!!」

レーザーは一直線にバッファローのエンジン部分を貫き、直径数センチ程の穴を開けた。

刹那、F2Aバッファローは機能を停止し、損傷が全く無い状態で深き海洋へと堕ちて行った。

計12機のF35Cにより編成された支援部隊はABLを主力としたピンポイント攻撃によって華麗とも言える程に敵機24機を瞬

時に全滅させ、第一次攻撃隊の損害を最小限に食い止めた。

一方の第一次攻撃隊はミッドウェー基地に大規模な損失を与えていた。

午前五時半より開始された集中空襲は功を奏し、ミッドウェー基地航空隊は大打撃を被った。敵迎撃隊がF35Cの支援部隊に撃墜された事から、友永大尉率いる第一次攻撃隊にとって地上殲滅は時間の問題だと思われたが、敵戦力は今だ健在だ。

『飛龍』飛行隊長の友永大尉は108機を率いる者として、最善の手段を講じなければならなかった。ミッドウェー島爆撃は成功したものの、戦線より退避していた敵機は第一次攻撃隊の迎撃の為、戻りつつある。やがて唐突に北西の方角より日本海軍の新型機——と称されている奇妙な戦闘機が接近しているのが明らかとなり、友永は愕然とした。

迎撃から数十分と経たないぞ……。

余り余ったその力は、既に大日本帝国の技術力の粋を越えていた。それ所か、米国やドイツさえも凌駕している。

——針は七を刻む。

爆撃は順調に進み、護衛機である零戦は新型機によって今だ機銃掃射を行えていない。しかし、それも終わりを告げるようだ。空母『エンタープライズ』『ホーネット』から戦闘機、爆撃機、雷撃機計116機が甲板上より飛び立ち、第一次攻撃隊への大規模迎撃を策謀しているようだった。

飛行場は紅蓮の猛火に包まれていたが、攻撃隊の到着前に半数の戦闘機が抜けており、既にもぬけの殻だった状態の飛行場に対する攻撃は不十分だった。

友永大尉は『第二次攻撃ノ要アリ求ム』と電報を打ち、南雲長官はそれを検討する事となる。

その刹那の事、突然前方にF4Fワイルドキャットが現れ、友永大尉は眉間を顰めた。敵機の銃身が振動の中、友永機へと狙いを定

める。

「くそッ！」

友永が操縦桿を押し上げようとした瞬間、一筋の光がワイルドキヤットの胴体を貫いた。

しかし、手遅れだった。機銃は機体の右翼に対しいくつかの損傷を与え、海へと沈んでいつて消えた。

敵機を撃墜した謎の新型機は見た事も無い速度で空を駆け抜けていた。

南雲忠一中将は第一次攻撃隊の電報を受け、その攻撃に対抗する為に『やまと』F35の増援を要請し、同時に敵空母攻撃用に待機していた攻撃隊の兵装を地上攻撃用の爆装に変更するという兵装転換作業を命じ、8時頃には大半が作業を終えていた。

そんな中、筑摩の偵察機が『敵水上部隊発見』との報告を打電してきた。

史実上では、首脳部は近海に敵空母が居ないと誤った判断をしていたが、未来を知った山本長官は対策案を画策。『やまと』からハープーンを搭載したF35C攻撃機の発進を決定した。

燃料と弾薬の補給の為、帰艦していた河合は空母攻撃隊に編入され、すぐに飛び立った。

河合は座席に寄りかかってヘッドマウントディスプレイを付けた頭を後ろに反らし、硬くなった首を解す。そして大きく深呼吸し、生暖かい空気を肺一杯に吸い込んだ。

F35支援戦闘機群の発艦より数十分、雲間より海上に広がる巡洋艦と駆逐艦群が姿を現し、そのすぐ近くにはホーネットが波を切り裂き、逆巻く海面が確認出来る。米国海軍艦隊上空まで接近した後、数機のF35Cは空母『ホーネット』より飛び立とうとする爆撃機隊を確認し、早急な対応が必要である事を河合達は理解出来た。

「アレス1、コンタクト」

しばしの沈黙の後、返答が帰ってくる。

『……こちらヤマト・コントロール。交戦許可』

「Wilco（了解、命令実行）」

機首のAN/APG-81レーダーは空母ホーネットを補足し、大型液晶ディスプレイに目標が映り込んだ。

河合はサイドステックで高度を維持しつつ、液晶ディスプレイを指で触れ、ハーブーン攻撃準備に移行し、座標を合わせる。

「FOX1!!」

F35Cより落とされたハーブーンは空中で点火し、飛行を開始した。

遷音速で突き進むハーブーンミサイルは白い尾を後ろに付けながら、空を飛んでホーネットへ向かう。

ホーネット甲板では、TBD雷撃機の発艦準備を進めていた整備員の1人が、怒涛の如く空から接近する物体の存在に気付き、それを見据えていた。それは徐々に接近しており、整備員は妙な胸騒ぎを覚え、それは当たった。

謎の物体は艦橋近くに直撃し、大規模な爆発が起こる。

紅蓮の火柱が空高くまで舞い上がり、水平線の彼方よりその光景を見たエンタープライズは急速離脱態勢に突入した。

その光景を目撃したスプルーアンス少将は渋い表情を浮かべ、歯を食い縛った。

9話 ミッドウエー島襲撃（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

10話 変革する歴史

終わった。

レイモンド・スプルーアンス少将は叱咤するのを止めた。たった今、空母一隻がいとも簡単に沈んで行くのを目の当たりにして、衝撃と絶望で身も心も麻痺していた。

艦橋の窓際の前で、スプルーアンスの輝きを失った瞳が虚ろに海を見据えている。凍り付いたその顔には苦難と後悔が浮かび、きつく嚙まれた口からは僅かな空気しか漏れていない。やがて鋼の大地を歩みだしたが、その足取りは思わしくなかった。

沈んでしまった。スプルーアンスの意識が遠のいた。

参謀長が手を伸ばして肩を掴んだが、スプルーアンスは未だ沈没する空母を見据えていた。

「……完全なるミスだな」

スプルーアンスは静かに追悼の辞を捧げた後、身を翻して後ろを見た。その瞳は怒りに燃え滾り、眉間には皺が寄せ合わさっていた。

「さあ、行こうか」

返答を待たず、スプルーアンスは艦橋を後にした。

1942年6月5日 pm 22:01

米海軍完全撤退。

始めの数時間、やまと乗員は啞然として誰も口を開かなかった。

新城はわびしく虚しい感覚を感じつつも、その真意を誰よりも理解していた。何とも呆気無い為か……皆、まるで麻痺しているようだ。F35Cパイロット達は誰よりも沈黙を通した。本能が理性を縛り上げ、感情の渦が身体を包み込む。

その瞬間は訪れた。『ミッドウェー大勝利』。

6月5日より7日まで続くはずだった大海戦は歴史より2日早く

終息した。それが意味するものは数多だったが、何よりも歴史改変を意味した。

ヨークタウンを失った状態で挑んだ米海軍はホーネットを轟沈させた事から戦線撤退を決定し、それを実行した。もぬけの殻となったミッドウェー基地には翌日、日本軍機が着陸して復興に励んだ。

翌日には理解したやまと乗員達の歓声が沸き上がった。

大日本海軍は正規空母に対しての損傷はあまり無かった。

——これこそが全ての始まりだった。

1942年6月8日。

真珠湾へと舞い戻ったスプルーアンスを待っていたのは、上官ハルゼー中将だった。

揺るぎない眼差しで見つめるハルゼーの顔には皮膚病から来る複数の発疹があり、それがよりスプルーアンスの恐怖心を駆り立てる。ハルゼーはおもむろに一枚の用紙を差し出し、それを向けた。『

査問委員会呼出通告』

スプルーアンスの顔は恐怖に染まったがハルゼーはその用紙を真つ二つに破り捨て、海へと投げ捨てた。その行動には流石のスプルーアンスも驚愕していた。一体何なんだ？

「……少将。今回の件に関して大統領は特別に許すそうだ」

ハルゼーは腕を組みながら言った。

「代わりに新設された組織に加入して貰いたい」

「一体どういう組織なんです？」

スプルーアンスは当惑しながら訊いた。何だか嫌な予感がする。

「特殊戦略室——SSRだ」

突如、ハルゼーの後ろから瓶底眼鏡を掛けた男が姿を現し、低い声色で告げた。男について、スプルーアンスは全く面識が無い。

「誰です？」

「国家航空諮問委員会のルイス・オルグレンです」

オルグレンは手を伸ばし、スプリアンスと握手を果たした。

「SSRは『OSS』と『NACA』の職員を集め、造られたOSS内の特別部です。大統領直轄の組織で目標は貴方も見た通り、日本軍の新兵器調査と対策です」

「なるほど……」

スプリアンスの当惑した顔を見て、オルグレンは笑みを漏らした。

「心配なさらず。上手く行きますよ」

10話 変革する歴史（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

登場人物紹介 1

―海上自衛隊―

○新城樹 あらき たつる

兵庫県神戸市出身。34歳。A型。

護衛艦隊隷下の1つ、第一護衛艦群所属。階級は三等海佐。航空機搭載型護衛艦『やまと』副長及び砲雷長。海上自衛隊幹部候補生学校では総短挺競技において数々の勝利を収めた。祖父は戦艦『大和』の元乗員の1人で、坊ノ岬沖海戦の生存者であり、新城自身幼い頃にその話を聞かされ続けた所から戦争の悲惨さと現日本に行き着いた軌跡を教え込まれる等の影響を受け、自衛官の道を進んだ。タイムスリップの危険性を訴えながらも自衛官としての真の意義に葛藤し、表面的には歴史改変肯定派となっているが、内心では否定もしている。

○倉本誠一郎 くらもと せいいちろう

航空機搭載型護衛艦『やまと』艦長。一等海佐。

乗員の生命と司令の命令を最優先する結果、歴史改変を承諾し、ミッドウェー介入を決定。内心では否定的な立場を取っているが日本海軍からの物資支援の為、なるべく沈黙を貫いている。数年前、所属していたDDH『かが』において重大な欠陥を見つけた所から先進技術に懐疑的で、カタクラフトシステムにも違和感を覚えている。

○井上民也 いのうえ たみや

航海長。階級は三等海佐。

常に人命を優先し、台風12号接近の際も撤退を打診している。歴史改変には肯定的で、米軍の計画的大空襲や沖縄戦、原爆投下等

で死亡した人々の生命を救いたいと心から願っている。

○横浜広一 よこはま こういち

電測員長。階級は一等海曹。

CICではオペレーターとして新城のバックアップを行ったりしており、瓶底眼鏡が特徴。防衛大学校では日本戦争史において非常に優秀であり、現在でも歴史書を愛読する傾向にある。人命救助には積極的意欲を持っているが、バタフライ効果等を危惧してか歴史改変には否定的。

○長和翔 ながわ しょう

機関長。階級は三等海佐。

カタクラフトシステム運用責任者で、対北朝鮮軍戦闘時には迅速的にシステム起動を促した。歴史改変には中立的立場を取っている。

○三吉明 みよし あきら

飛行科員。階級は三等海曹。

SH-60K哨戒ヘリコプター運用員の1人であり、大和初遭遇時には不審船調査として偵察任務の哨戒ヘリに搭乗。対空攻撃を受けるものの生還した。歴史改変には肯定的。

○西村寛 にしむら かん

飛行長。階級は一等海尉。

戦史に長けるという部分から艦長とともに大和へ乗艦。間近で歴史の片鱗を見た事に感銘を受け、改変に意欲を示すようになる。

○河合昭一 かわい しょういち

飛行科員。階級は一等海尉。

海上自衛隊初の支援戦闘機部隊に所属。F35Cパイロットとなり、『やまと』へ配属される。戦闘に対しては否定的であり、正当

攻撃と称されているとはいえ、命の搾取を行つたとして悔やんでいる事が多く、夜はうなされる事も少なくない。歴史改変には一部否定的。

○美浦舞 みうら まい

飛行科員。階級は一等海尉。

海自支援戦闘機部隊の紅一点。F35Cパイロットとしての初任務では空母『ヨークタウン』に対し、LJDAM投下を成功させている。歴史改変には肯定的であり、河合に関しては尊敬の念を抱いている。

― 民間人 ―

○トマスⅡ 藍畑 あおはた

カタクラフトシステム開発者。21歳。

メタンハイドレート海上掘削施設『きぼう』現場指揮官としてやまとに乗艦。同時にシステムの不具合についても調べている。チェディアック・東症候群の合併症としてメラニン色素が欠如。髪や肌は蒼白で瞳は青紫色に変色している。マサチューセッツ工科大学（MIT）を卒業後、父親が開発したレーザー掘削技術を応用化させた『カタクラフトシステム』を開発。日本に技術購入権を与え、売却した。祖父は太平洋戦時中、コロラド州のグラナダ日系収容所に在所。熱狂的な天皇崇拝者としてアメリカ国籍放棄を名乗り上げ、反米主義を貫いた。藍畑自身も祖父・父親同様熱心な天皇崇拝者として、2039年日本国籍を取得している。機械工学・医学・エネルギー学・物理学において多大な知識を持ち、身体健康維持に必要な抗生物質を造る為、731部隊に所属する。

いんてい あゆむ

○近藤歩

新聞記者。

採掘施設『きぼつ』取材の為、やまとに乗艦。タイムスリップを遂げる。新聞社入社後初となる取材が『きぼつ事件』であり、今回の取材では真相を突き止めたいと躍起になっていたが、タイムスリップ後の世界において自衛官達や過去を記す記録者として、ジャーナリスト魂を燃やす事となる。

―特殊戦略室（SSR）―

○ルイス・オルグレン

国家航空諮問委員会（NACA）職員の1人。

委員会より空母『ヨークタウン』に使用された日本軍新兵器の調査の為、派遣。オアフ島の海軍工廠にてその兵器の威力を知る所となる。その後、オルグレンの報告がアメリカ合衆国大統領ルーズベルトの耳に入り、特殊戦略室（SSR）設立。代表メンバーの1人として科学部門にて働く事となった。第一次大戦時にはハルゼー中将が艦長の駆逐艦『ベンハム』に海軍少尉として乗艦。中将との面識を持っている。

○ウィリアム・F・ハルゼー

アメリカ海軍中将。

ルーズベルトの命により、大統領直属組織『SSR』の長官を務める。オルグレンとは第一次大戦時、面識を持っている。

○レイモンド・A・スプルーアンス

アメリカ海軍少将。

ミッドウェー海戦時、負傷したフレッチャー少将に代わり機動部隊指揮を執っていたが惨敗。その失態から一時は査問委員会が開設

されたが、ルーズベルト大統領の許しを受ける代わりとしてSSRに勤める事となる。

11話 SSRの初陣

1942年6月9日Am08:22

オアフ島

特殊戦略室(SSR)司令部

地下の施設は薄暗く、天井には幾つかの白熱電球が取り付けられている。大人数向けの防空避難施設なのは明らかだった。窓は1つも無い。SSR科学部門部長のルイス・オルグレンが床上を軋ませながら鋼鉄製の扉を閉めて明かりのスイッチを入れると、換気用の小さな筒穴が露となった。

オルグレンはオーク材の卓上に集められた米海軍の資料を漁り、何枚かの白黒写真を取った。それを隣に居たハルゼー中將に見せる。

「これはミッドウエーで哨戒機が発見した新型空母です」

オルグレンの示した写真を見て、ハルゼーは思わず唸った。その大きさは尋常では無い。

「続いて、近海に見えられた大型戦艦です」

「……聞いた事があるな。確かONI(アメリカ海軍情報局)が名前をリークしていたはずだ」

「お察しの通り、『大和』でしょう」

「それにしても凄い大きさだな」

我ながら日本の技術に感服するとはな……。

「大きさから想定するに、新型空母は全長約300〜330m。

戦艦『大和』より大きいです」

オルグレンは真剣な口ぶりで言った。

「奴は我々にとっての疫病神だよ」

「その通り。この空母からは新型戦闘機が多数発艦しています」

オルグレンは卓上から一枚の白黒写真を手に取り、ハルゼーに見

せた。そこには見た事も無い戦闘機が写り込んでいた。

「中将。お分かりの通り、これはジェット戦闘機です」

これまで。そしてこれからも米国は日本を過小評価するだろうが、これを見れば海軍長官だろうが大統領だろうがその危険性を認識し、真剣になるだろう。事実、ルーズベルト大統領はその情報を聞いてこの組織を設立した。

「そこで提案ですが、現在空母を追尾している潜水艦『ガトー』による攻撃を行うべきかと……」

「たった潜水艦一隻でか？」

ハルゼーは眉間を顰めながら告げた。

「今回はあくまでも対潜データの収集目的です。上手くいけば沈没出来るでしょう」

オルグレンの顔に浮かぶ微笑が、ハルゼーの知らない何かを表している。自信に満ちた足取りで机の周りを歩いた。

1942年6月10日pm23:05

トラック諸島

ミッドウェー沖戦闘を終えた『やまと』は空母群と同行しつつ、トラック諸島へと到達していた。乗員達は未だ通達されていない大本営の島上陸許可の為、停止したやまとの中で待ちわびていた。海は不気味な程静かで、波の音しか聞こえない。

『やまと』医務室では、医官の大西一等海尉がやって来た新城三等海佐を診断し、バイエルアスピリンの入った紙袋を手渡していた。「恐らく心的外傷後ストレス傷害（PTSD）から来る頭痛かも知れませんね」

「心的外傷後ストレス障害……」

新城自身、認めざるを得ない。

「極々初期的なものだから心配は無いですよ」

大西はそう言い、カルテを卓上に置いた時だった。突然、艦内に警告アラーム音が鳴り響き、金属の擦れるような音が室外より漏れ出した。新城はすぐに立ち上がり、CICへと急いだ。

『やまと』CIC

闇に包まれる室内に警告音が鳴り響く。

CICに常務していた横浜一等海曹は慌ててやって来た新城に報告書を提示し、読み上げた。

「なるほど……潜水艦が？」

「はい、数は1」

哨戒目的か？

新城は呆然と頷きながら心の中で呟いた。レーダー画面上には1つの座標が記されている。この時代の潜水艦では航行中の『やまと』を攻撃する事は不可能に近い。停泊している以上、この艦はいい力もとでもいう所だろうか……。

「07式垂直発射魚雷投射ロケットで攻撃！対潜戦闘用意！07式ロケット発射用意！」

新城の声と同時にCIC内が慌しくなる。

「同時にカタクラフトシステムを艦底部に集中展開！」

VLSが轟きを漏らし始める。

それとともに、艦底部に青色のシールド壁が出現した。

ガトー級潜水艦『ガトー』

1941年12月31日に就役したガトーはミッドウェー海戦時、正体不明の新型空母後方に潜航し、見張り続けていた。その後、特殊戦略室（SSR）の命により新型空母を追尾。随時情報を伝えていた。

「クリスマスまでに戦争を終わらせたいよ」艦長のウィリアム・ジラード・マイヤーズ少佐は潜望鏡から海面上を覗き、追尾している新型空母の存在を確認した。SSR司令部から送られてきた電報

から、撃沈命令が下されている。

マイヤーズは潜望鏡を下げ、艦を静止させた。距離は900m。方位盤手はボタンを押し、必要な発射データを発信する。魚雷砲撃手は射撃準備を進め、完了させた。「準備完了！」

敵は港湾に停泊。他艦とは離れている様だ。

艦内の乗員達は固唾を呑んで時を待つ。

そして――遂にそれは始まった。「ファイア（発射）！！」

21インチ魚雷発射管より随時発射された6発の魚雷は航路を残さず、目標に向かってまっしぐらに突っ走る。沈黙の乗員達は祈り、胸に十字架を切って直撃を乞う。

――身体を迸る複数の振動音。

それは、魚雷直撃を告げる合図であつた。

「よし……」

マイヤーズは笑みを漏らし、爽快感と優越感を覚えた。6発中5発は直撃しており、撃沈は時間の問題だろう……。

だが、油断は禁物。

それをマイヤーズは身を持って知る所となる。後方撤退を号令しようとした時、鋼の壁から不気味な潜水音が響き始めたのだ。マイヤーズが慌てて潜望鏡から海上を覗くと、信じられない光景が視界に映っていた。

……何のダメージも受けていない。

確かに当たったはずの攻撃は意味を成さず、空母は傾かないばかりか黒煙や炎も上げていない。全くの無傷だった。

マイヤーズはSSR司令部に対し電報を送るよう伝え、通信員はそれに従って瞬時に打電した。少なくともこの異常的状況は絶対に報告せねばならない。

不気味な振動音は確実に近付いている。

妙な胸騒ぎを覚えた瞬間、ガトーは爆発した。衝撃で吹き飛ばされたマイヤーズは頭を鋼の地面に打ち付け、倒れ込んだ。

――浸水。悲鳴。轟音。

朦朧とする意識と目眩を覚える視界は何万ガロンにも及ぶ海水と、乗員の死体を捉えていた。マイヤーズは動揺の色をたたえた目で天井を捉え、白熱電球の光源を見据えた。それはまるで——天国への扉のようにも思えた。血だらけの耳には2発目の魚雷が接近する音が入り、マイヤーズの目は恐怖に染まり切った。

そして——終わった。

三章『ミッドウエー』 完

11話 SSRの初陣（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

四章『FS作戦』 12話 ガダルカナルの罠

1942年8月7日Am03:24

ガダルカナル沖

空母『エンタープライズ』艦橋から、フランク・J・フレッチャー少将が悠然と下りて来た。最後の準備に取り掛かる頃合だ。甲板上に置かれたF4F『ワイルドキャット』の近くには、米海軍ベテランパイロットのジョセフ・ボールドウィン少佐が頭巾片手に空母群と輸送船団から描かれる航跡を目で辿っていた。

何としても作戦を成功させねば……。

フレッチャー少将は呟いた。珊瑚礁海沖でレキシントン沈没。ミッドウエーではヨークタウンを再起不能にされた事により、日本陸海軍の航空部隊の存在に畏怖感を募らせ、空母戦鬪群を後方へと置きたいと少将は考えていた。しかし、特殊戦略室（SSR）と軍上層部の命令により、ガダルカナルへの集中爆撃と日本軍新型空母撃沈は成功させなければならない。

米海軍情報局の報告によれば、暗号文の中に『YD』と呼ばれる暗号が含まれており、それが新型空母であるというのが局の見解だった。また、通信暗号には『FS作戦』遂行の為、ガダルカナルの建設が続けられており、設営隊約2000人が作業を続けているという事実が含まれていた。米軍は対日反攻作戦となる『ウオッチタワー作戦』を成功させる為にも確実な勝利が必要となる。

フレッチャー少将は来た道を引き返し、艦橋指揮室へと向かった。階段を再び上り、鋼の通路を突き進んで行く。ハブコック&ウィルコックス社製ボイラーの低い騒音が癪に障った。指揮室の中へと入室し、窓から外を見据えた。

……何も無い。ガダルカナル島と我が合衆国軍艦隊以外は。

視認灯の点滅が水平線の彼方よりフレッチャーの視界に流れ込んだ。双眼鏡を手に取り、レンズ越しに艦種を確認する。どうやら空母『ワスプ』のようだ。

ワスプ周辺には4つの幻影が見え、それが駆逐艦である事が推測出来た。心配したが、大丈夫なようだな――。

うわっ！？

眩い閃光がいきなり視界に飛び込んで来たので、フレッチャーは跳びずさった。2つの爆発よろしく、薄く光る2つの爆炎は空母ワスプの危機を知らせる。フレッチャーは呆然と見据えていたが、すぐに指示を出す事にした。

「全航空隊発艦！爆撃隊は上陸部隊の援護に向かわせる！」

フレッチャーは叫び、双眼鏡よりワスプを見た。沈んでいる……。左翼ではアレキサンダー・ヴァンデグリフト少将率いる海兵隊上陸部隊を支援する連合国軍艦隊が吸い込まれるようにして無数の砲弾を島へと放ち続けており、その轟音は耳によく入った。

「状況報告！南方艦隊からの無線通信切断。沈黙しています！」

通信員の発言にフレッチャーは目先の爆発だけではなく、別の問題も生じたのを悟った。艦砲射撃が続けられている以上、無線に問題があるのか？

無線機のスイッチを入れ、通信員がワスプとの交信を試みようとしたが繋がらない。相手に先を越され、沈没したようだ。

「各員に告ぐ。当艦は一旦後方に撤退する」

フレッチャー少将の言葉は遅く、既にSSR直轄の航空隊は発艦していた。F4Fワイルドキャットパイロットであるボールドウィン少佐は行き先を知らされた時、驚くほど楽観的な反応を示した。日本軍など雑兵の寄せ集めだ。負けるはずは無い――と。

問題は、意思疎通だ。

ガダルカナルに近付くにつれ、何故か無線システムが使えなくな

り、雑音のみが虚しく響くばかりだった。暗黒の世界ではとても心細い。

「ジャミングでもされたか……」

現在地を確かめようと、キャノピー越しに周りを見回した。真つ暗だが、艦砲射撃の閃光で友軍艦艇の位置が分かる。高度500メートル地点を編隊飛行するボールドウィン隊は安心感を覚えていた。しかし、それはすぐに崩壊する。

突如、背後に衝撃が襲う！

ツインワスプエンジンの駆動音は爆発音によって掻き消され、不気味な衝撃が背筋を走る。

対空砲火か！？

その刹那、遂にボールドウィンは理解した。味方は我々を敵と認識しているのか！情報伝達手段全体がジャミングされた状態と、夜という環境はまずすぎる。これでは味方がワイルドキャットを日本軍の戦闘機と認識しても何ら不思議ではなかった。

回避する暇も無く、味方が次々と落とされていく。騒然とした上空は逃げ惑うワイルドキャットの轟音によって包まれ、米豪英の対空火炮が添えられる。

ボールドウィンは機体を自在に操り、何とか南方艦隊上空より抜け出した。が、味方は半数以上撃墜されていた。

『やまと』CIC。

副長新城は新たな軍事行動の指揮を執っていた。肩をすくめ、電測員長横浜の隣へ躍り出る。

「状況は？」

「ジャミングにより米軍無線回線を封鎖。レーダーも使用不可能上々という所かな……」

新城はプラズマ・モニターを見据え、光学カメラの外部映像を確かめた。錯乱する艦隊群は与えられた艦砲射撃が続けている。誰も

居ないというのに。

それは一種の罠だった。

日本軍は未来情報を元にガダルカナルでの飛行場建設をわざと流し、それを米海軍に教えた。実際、その工作活動の一環として8月までは飛行場建設を行っていたが、今は全兵士が撤退している。

やまとの主任務はECMによる通信・レーダー妨害。

それを受けた連合軍艦隊は艦砲射撃、爆撃を続けて弾薬を浪費している。また、視線を島に釘付けにする事により、主要重巡洋艦や正規空母をハーブーンで撃沈。F35飛行隊の一部は日本海軍機動部隊によるフィジー侵攻を手助けしている。

こうして、第2の『ガダルカナル島の戦い』が始まった。

四章『FS作戦』 12話 ガダルカナルの罠（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

13話 消耗作戦

1942年8月7日Am04:21

ガダルカナル島

明朝。未だ薄暗い世界の中、アメリカ海兵隊第1海兵師団は師団長アレクサンダー・ヴァンデグリフト少将に率いられ、ガダルカナル島テナル川東岸への上陸を開始。友軍艦隊は訳も分からず命令通りに島へと艦砲射撃を行い、航空隊は大規模な爆撃を敢行した。通信網とリーダーシステムを妨害されている為、その砲弾はあらゆる地点に降り注いだ。

海兵隊員のフロスト軍曹は島の異変に気付いていた。何だか変だ……。

フロストは躊躇い、落ち着かない様子でM1ガーランドを握り締めながら海間を歩き抜ける。銃器が海水に入らないよう、両手で頭上へと掲げながら進む。

やがて海岸に上陸すると、更なる異変にフロストは気付いた。聞こえるのは砲撃音と空襲音のみ。対空火砲は1つも上がらず、悲鳴も無し。

「陣地確保急げ！」

上官の声を聞き、フロストは急ぎ足になった。30秒後、海岸の至る所で地雷が炸裂し、火薬臭と肉片が宙を舞う。

……地雷原。

どうすればいい？

海水で濡れた軍服を震わせながら、M1ガーランドを構えた。足元に注意しながら慎重に進み、突撃の意志は変えない。やがてルンガ川近辺の飛行場が姿を現したが、誰も居なかった。

代わりにあるのは——巨大なコンテナが1つ。

飛行場中央に置かれたそれは赤色の大型貨物用コンテナで、ぽつんと1つ不自然に置かれていた。

地雷原を抜けた約10000人の海兵隊員がそれに向かい、進む。だが、フロストだけは嫌な予感を覚え、なるべく足取りを遅くした。頭の中に駆け抜ける直感がそれを危険と教えてくれている。

刹那、空に正体不明の航空機が姿を現す。

それは背面から火炎を噴き出し、猛スピードで突き進んでいる。

「アレス1、コンタクト」

F35Cパイロットの河合は液晶ディスプレイ越しに映る人衆の存在を確認する。

『ヤマト・コントロール。攻撃許可』

「Wilco（了解、命令実行）」

機首下部のEOTSが音を立て、レーザーを飛行場に照射する。それから液晶ディスプレイに指を触れ、発射司令を下した。

投下。それはLJDAMによる対地攻撃。

赤外線レーザーに沿う如く突き進むLJDAMは落下する。刹那起こった爆発は飛行場を深々と傷付け、海兵隊員達も宙に舞い上がる。

死神が空を飛んでいる。

フロストは啞然としてそれを見据えた。2発のLJDAMは瞬時にして1000人近くの間人を死に追いやった。背後では更に2発。側面からは計4回の爆発音が轟く。難を逃れたフロストは衝撃から肺呼吸を忘れ、息が苦しくなった。

息をしろ！

深々と息を吸い、肺に空気を満たす。

胸が反り上がるのを感じ、同時に灰煙混じりの空気が肺を満たした。

この光景を知らしめてやりたい……、と飛行場を見渡して思った。この悲惨な現状を。

今朝、ここでの役割をフロストはまだ理解していなかったが、ほ

どなく知る所となるのだ。

空母『ワスプ』沈黙。

そんなばかな。フレッチャー少将は啞然とした。ただでさえ凄惨な光景を前々から見て、それにも巻き込まれてはいたが、この光景は更なる衝撃を与えた。恐らく、敵に対して正面からの攻撃は通用しないだろう……。

フレッチャーは空母『サラトガ』の視認灯を認識していた。双眼鏡より見えたその光源は安心感を与えていた。——少なくとも数分後は。

突如、サラトガの居る海面上に火柱が噴き上がり、薄い光が艦橋を包み込んだ。ハーブーンはサラトガの甲板を切り裂いて、大きなへこみを与えた。艦体は激しく湾曲し、鉄や弾薬や戦闘機や乗員が爆炎に溶けながら破片となって空に舞い上がった。

南下しつつあるエンタープライズから、フレッチャーは爆発を見た。朝霜を震わす重々しい轟音と激しい閃光に、フレッチャーは我に帰った。

確実に撤退せねば……。

フレッチャーは南太平洋海軍部隊指揮官ゴードリム中將に何も言わず、独断での南下を完全敢行する事に決めた。

13話 消耗作戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

14話 ボールドウィン航空隊

1942年8月7日 Am 04:56

ガダルカナル島タイボ岬

一体どうなっているんだ？米海軍のジョセフ・ボールドウィン少佐は今までに無い畏怖感に襲われ、背筋を伝う悪寒を感じた。下にはガダルカナルのジャングル群が果てし無く広がり、曙光を受けて不気味な影を形成している。

F4Fワイルドキャット隊は今や15機。対空母戦闘が行えるか疑問だった。

部隊の兵士達はこれからF4Fワイルドキャットに乗り込むという時、この戦いに好意的だった。パール・ハーバーの仇討ちが出来る。クリスマスまでに戦争を終わらせられる……と。

だが、友軍の誤射後、どうやら状況は一変したようだ。

ほんの少し前の出来事を忘れようとボールドウィンは頭を振り、両目を擦り合わせた。しっかりしろ！無事空母に帰還して見せるんだ！

突如ボールドウィンの視界に、紺碧の海が流れ込んで来た。編隊は密集から散開気味に陣形が変更されて、F4Fワイルドキャットは高度を徐々に下げる。青く艶やかな表面が曙光に反射して輝き、にわかに海面と同化する。

「……空母か？」

肉眼で視認出来るその艦影は、どうやら空母のようだった。海域から察するに、恐らく敵の艦かと思われた。他のパイロット達もそれに気付いたらしい。次第に大きくなる敵の空母はエンタープライズの一、二周り以上の大きさで――まさに海の怪物『リヴァイアサン』か『クラーケン』のようだ。

「やってやるぞ……」

ボールドウインの足の下で、同隊のF4Fワイルドキャットが速度を上げた。その機のパイロットは固唾を吞んで座席に腰を埋め、空母へと疾走していった。

焦るな！

ボールドウインは勇猛果敢な新兵——愛国心溢れる大学生らしい行動を示すのをよく思わなかった。敵空母の情報は殆ど提供されていない以上、どれだけの対空火砲が搭載されているかも分からない。その心配は現実となった。

突撃していったF4Fワイルドキャットは落下していた……何も攻撃出来ずに。

深い海洋を漂う荒波は墜落したF4Fワイルドキャットの湾曲した体軀を這うようにして包み込み、底に沈めこんだ。残ったのは残骸の一部だけだ。

「くそッ！！」

憤慨は何にもならない……が怒らずにはられない。

海に撃墜されたのは大学生だ。未来ある人間だ。

水中に沈むF4Fワイルドキャットを一瞥した後、ボールドウインは急上昇した。負荷が身体に襲い掛かり、機体が激しく振動する。鼓動は高まり、呼吸数が増大した。

しだいに味方のF4Fワイルドキャットも一定の距離を取った散開陣形で速度を最高まで引き上げ、そして——空母上空から一気に降下した。

『やまと』CIC

砲雷長新城は冷静に接近するF4Fワイルドキャットへの攻撃を命じた。

「ファランクス迎撃用意！」

艦艇用近接防御火器システムの『フランクス』は搜索・追跡レーダーと火器管制システムから成り立つ完全自動型防衛兵器であり、有名は対空兵器の1つである。白色の半球型レーダードームと追跡レーダー搭載型の胴体。そしてM61A1バルカンの銃身が姿を覗かせた形態を取っている。

最大射程4500m。有効射程1500m。有効迎撃射程は550mである。

「フランクス迎撃用意よし！」

第1分隊の隊員がそう告げ、新城は光学カメラが示すディスプレイに目を向けた。そこには、急速降下を始めるF4Fワイルドキャットの機影とそれに銃身を向けるフランクスが映り込んでいた。システムが起動しているフランクスは勝手に敵を見つけ、排除する。全自動式のフランクスに必要なのは弾薬補給の補給員ぐらいである。

レーダーと赤外線センサーがF4Fワイルドキャットを捉える。刹那、射程内に入った3機のF4FワイルドキャットをフランクスのM61A1バルカンが火を噴く。装填されている計989発の86式20mm機関砲用徹甲弾が空に叩き付けられ、甲板上に乾いた音が響き渡る。

フランクスの銃撃は激しかった。弾薬を心配してか攻撃を担うのは1基だけだったが。

前の3機は後ろから迫る友軍機を守ってくれた為、ボールドウィンは活路を見出せた。

やるなら今しかない……。銃撃の無い唯一の空路を見つけ、そこに全ての希望を掛けて見た。しかし、フランクスの新型レーダーは容赦無くボールドウィンのF4Fワイルドキャットを捉えている。一瞬、対空砲撃が両翼をかすった。

「まずい！！」

洗練された手捌きで機体を操ったが、敵の対空砲は確実と言える程、機を捉え続けている。ボールドウィンに残された手段と言えば

……命懸けの敵討ちしかない。

「食らいやがれジャアアアアアップ!!」

搭載していた500ポンド爆弾2発を勢い良く落とした。その一瞬の内に、容赦無いフランクスの砲撃を食らうF4Fワイルドキャットよりボールドウィンは脱出した。落下傘は大きく空に開き、下へ下へと落ちていった。

そんな中、500ポンド爆弾が空中で炸裂する光景を――ボールドウィンは見ていた。虚しかった。しかし、空中炸裂した爆弾片とF4Fワイルドキャットの残片はあの対空兵器に直撃し、空に黒煙が立ち昇っている点については成功した。15機もありながら……こんな事ありえない……。

下半身が水に浸かると同時に、足が強い力に引き摺り込まれるような感触を覚えた。

途方も無く広がる海原の上。そこに落ちたボールドウィンは自身の今後に絶望感を覚えていた。何とか空気中にある頭も海底へ沈もうとしている。強烈な波の力がまるで手のように……。

流れが速くなり、海流に乗ったのだとボールドウィンは悟った。次第に顔が海に浸かるようになり、口の中が塩辛くなった。誰か助けてくれ!!

一瞬、全てが真っ白になった。

冷たさ。塩。痛み……。

俺は死ぬ……溺死だ。戦死じゃない。

容赦無く沖へ沖へと誘い込もうとする海流は執念に波を叩き付ける。肺は空気を――喉は真水を渴望するが、ボールドウィンは何も出来ない。

その時だった。

突然、海間に荒立つ波が強くなった。振動が胸を伝う。

「……救助か？」

見慣れない小型船舶が自身の元へ……徐々に近付いて来る。日本

軍か？ボールドウィンは捕虜となるのを悟り、覚悟するしかなかった。ジャップがどんな事をするか……幾つかの噂があったな。

——ボールドウィンは海上自衛隊により、救助された。

14話 ボールドウィン航空隊（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

15話 やまとのカレー

『やまと』調理室

1942年8月7日は金曜日という事から、給養長の谷部一等海尉は朝から調理の下ごしらえに必死だった。このやまとでは5000人の給食を40人程度の給養員が調理を担っており、平均からすれば1人で50人の海自隊員の食事をカバーしていることになる。今彼らが作っているのは、言わずと知れた『海上自衛隊カレー』である。

長い間、古くはイギリス海軍より伝わる海軍カレーの流れを持つ海自カレーは毎週金曜日の慣例儀式として全ての部署が食し、曜日感覚を呼び覚ます。

タイムスリップした世界において、海自カレーは通常よりも狂った曜日感覚や現実逃避を逃れる特効薬としての役割も果たしている。ここ最近。そしてこれからもカレーは続くのだろが、作り置きが許されない為、カレーは給養班にとっては手間の掛かる料理である。5000人分のジャガイモやニンジンの総重量はハーブの弾頭に匹敵し、調味料だけでも20キロはある。専用の大鍋は常にフル稼働し、暖かげな蒸気は換気扇へと立ち昇る。

海自カレーは各艦艇によって異なる。

護衛艦『しらせ』はシーフード。『くらま』はハヤシライス。そして『ひゅうが』はビーフカレーだ。このやまとにおいてはビーフカレーだ。

また、隠し味も各艦によって異なり、やまとではインスタントコーヒーによって味に深みを増し、刻み炒めたニンニクを入れて食感と味を良くさせ、最後に赤ワインを加えている。

常に熱気溢れる調理室の中、谷部は何か間に合うようにと考えていたが、不安だった。食糧が底を尽き掛けているという点が1番であり、例えば大日本帝国海軍から支給されたにせよ、カレーの純度

が落ちる事は明らかだろう……。

後ろで巨大な炊飯器が蒸気と鈍い唸り声を上げる中、5000人分のジャガイモとニンジンの皮を剥く。

たまねぎから出る硫化アリルが気化して鼻孔や目に入り込み、涙を誘う。冷蔵庫で冷やしていたのと水に着けていた為、それ程まではきつくなかったものの、200個はあるうかというたまねぎが入った大きなダンボールが調理室の床を占領し、包丁の音は止まらない。その横では大鍋が蒸気を噴き出し、カレールーの匂いが鍋蓋より漏れ出してきた。

「一尉、聞きましたか？アメリカ兵が救出されてこの艦に乗ってるらしいですよ」

涙が漏れる目を話し掛けてきた給養員に向け、谷部は鋭い眼光を突きつけた。

「……黙って調理を続けろ」

苛立ちに気付いたのか、給養員は後ずさりしながら再びジャガイモの皮剥きに戻った。

『やまと』医務室

ベッドに仰向けになったのは、あのボールドウィンだった。

フランク스에甚大なダメージを与えたボールドウィンは脱出後、海洋に漂うのを海自隊員達に発見されて救助された。右腕には念の為に点滴が打たれている。

ボールドウィンは背を起こし、吐き気の波が押し寄せる。息を詰めて遮断された立掛け越しに透けて見える医官の姿を凝視した。どうなるんだろうか……。

医官が近付いてくるのを見て、すぐに体をベッドに沈め、視線を背けた。ボールドウィンの全身に寒気が襲い、視界が激しく回り始めた。今見ているのは青い軍服を着た男。普段見るような日本兵とは違う事を悟った。

「大丈夫か？」

驚いた事に――男は英語で話した。

少し片言ではあったが、日本人らしいアクセントだから仕方ない。

「ああ……何とかな……」

赤毛と立派な髭を持つ白人ボールドウインの容態を見て、大西一等海尉は少し安心した。どうやら身体にはそれ程問題は無いようだな。

不意に、医務室の扉から足音が規則的に響く。換気ダクトの空調音と相まって轟くその音は、医務室の扉の前で消えた。

唐突に入ってきた1人の男。手には1つの大きな容器。

年は30代前後……軍医と思われる男同様の軍服に階級は――軍医より高いのか？

「始めまして。私は三等海……いや、海軍少佐の新城です」

この男も英語で話してきた。だが、途中で何か考えたのか口詰まっているな。

「食事です」

男は持っていた容器を開き、1つのカレーライスを取り出した。

それをベッドの机に置き、テーブルをセットする。ビーフカレーの温かな湯気がボールドウインの顎を伝い、香ばしい牛肉とニンニクのかおりが鼻孔に吸い込まれる。

カレー皿の隣にはゆで卵が1つとサラダ。そして真水。

スプーンとフォークが置かれた所から、ボールドウインの喉は唸りを上げた。

「何も話せる事はない……私はしがない海軍少佐だ」

ボールドウインの言葉に、新城は笑みを漏らした。

「我々が聞く事は何もありませんよ。聞きたい事と言えば……名前ぐらいでしょうか」

新城の言葉にボールドウインは呆気にとられた。聞いていた日本人のイメージとはそぐわない。とてもパール・ハーバーを奇襲した連中とは思えなかった。

「……ジョセフ・ボールドウィン」

「なるほど……」

新城はそう言い残した後、敬礼して部屋を後にした。医官の大西もデスクに戻り、作業を始めた。

残されたボールドウィンは――胸の中を伝う妙な感触を覚えていた。その時、日本人はそれ程凶悪では無いという感情と、もはや手遅れだという感情が芽生えた。畏怖と喜び。正反対の感情を同時に覚えたボールドウィンは当惑するしか無かった。

目の前のカレー。

毒が入っているかもしれない……。しかし、本能には逆らえなかった。

スプーンを固く握り締めたボールドウィンは、不安を募らせながら震える手でカレーを掬った。温かな感触がスプーンの取っ手から指に伝う。

目を瞑り、一口。

……何とも無かった。

だが、毒は時間が経って効くのかもしれない……。

口元に広がる味わいは――これまで感じた事の無い程の美味だった。戦時中にこれだけの味を拝む事は中々出来ない。日本人はどうなっているんだ？

SSR直轄の航空隊隊長として、この光景は絶対に伝えなくてはならない。

もし伝えられれば、勝利の糸口が掴めるかもしれないのだ。

15話 やまとのカレー（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

16話 バードストライク

『やまと』食堂。

時は昼。大勢の隊員達の眼前にある長机の卓上には、やまと特製ビーフカレーが並べられている。インスタントコーヒーとニンニクから来る香ばしい匂いは食欲をそそられた。海自隊員達にとって、此処は唯一とも言える憩いの場だろう。現実を一時忘れられる。

「新城三佐」スプーンに手を伸ばそうとする新城三等海佐は、唐突にやって来た西村一等海尉に呼び止められ、いぶかしげな顔を浮かべた。

「食事中なのは分かっているだろう？」

新城は辛辣な声で言った。

「承知しています……が、例の米兵について意見を述べても宜しいでしょうか？」

「……許可する」

新城は溜め息を漏らしながら言った。

「捕虜である以上、大日本帝国海軍に引き渡すべきかと……」

西村の言葉に新城は眉間を顰めた。新城は深入りするのは避けたと考え、何とか説得するしかないと覚悟を決めた。

「全ては艦長の決定だ」

「しかし……我々は実質海軍の隷下にある訳ですから——」

「そうだ。それは分かっている」新城は溜め息を漏らす「だが、現実には指揮下に入っていない。言わば我々は幽霊だ。海上自衛隊の最高総司令官は日本国総理大臣であって大日本帝国の天皇陛下ではない」

新城は言い過ぎである事に気付いたが、これぐらいしなければならぬと感じていた。最近是一部の改変肯定派によって風紀が乱れているのを感じたからだ。5000人と言えば一基地か町単位。そ

の人間達が勝手に暴れた場合、どうなるかは想像がつく。

話をしていく内、西村の考えが段々分かってきた。フランクスを中破したボールドウィンを少し恨んでいるようだ。

「では、正しい制裁を加えろと言っただな？」

「そうです」

新城は辛辣な視線を西村に向けた。

「一尉、言葉を慎め」

低く冷淡な新城の声は、西村の背筋をゾッとさせた。

そんな中、異変に気付いて艦長倉本が割って入ってきた。倉本は2人に厳しい視線を投げかけ、西村はとぼとぼと自分の席へと舞い戻っていった。

「艦長、失礼致しました」

残された新城は苦い表情を浮かべ、艦長に一礼して失言と行動を謝った。

……何とも酷い状況だな。

倉本はそう胸に呟き、自身の席へと歩みを進めた。

1942年8月8日Am09:47

『やまと』甲板。そこに停められたSH-60K哨戒ヘリコプターの中に、米海軍のボールドウィン少佐は居た。赤毛の白人の蒼い目は窓を突き抜けた先の紺碧の海洋に向けられている。

飛行士の三吉三等海曹が入ってきてても表情を変えぬまま視線を外に向け、指先を窓に伝わせた。こんな航空機は全く見た事無い。

「俺はどうなる？」

開いたドアから顔を覗かせていた新城に向けて言った。

「……ガダルカナルの飛行場で米軍側に受け渡しを行う」

この答えにボールドウィンは不意を突かれた。捕虜収容所にも送られるかと思った。

唯一許せる存在は新城と軍医、そして艦長ぐらいなものだ。他者

には面会が極力許されていないというのもあったが、此処まで来る中で艦内通路を通っていると、敵意を持った人間の視線を度々感じた。恐らく攻撃が影響しているのだろう……。

「何故収容所に送らない？」

「我々は通常の日本海軍とは……少し違うんだ」

新城は答えた。

「最後に教えて欲しい。この艦の名前を」

ボールドウインの発言に新城は一瞬驚き、戸惑った。俯いて深く考え込んでいる。

「……まとだ」

途中、声がメインローターの轟音で掻き消された。

そのまま新城は勢い良くドアを閉め、機体を強く叩いて合図を示す。刹那、暖機運転中だったSH-60K哨戒ヘリコプターは激しく胴体を引き上げて――飛んだ。垂直に。

ボールドウインはこの光景を信じられなかった。

「こちらブラックジャック1。離陸成功」

パイロットの声が鋭く機内に響き、SH-60Kは右に大きく傾いた。窓から見える情景から空母の姿が消え、紺碧の海洋のみが映り込んだ。ボールドウインは一瞬、哀しげな感覚を覚えた。それがあまりにもおかし過ぎる事は承知であったが……。

ガダルカナル島。

地上に鬱蒼と茂るジャングルは新緑の海の如く、風を受けてうねっている。

ボールドウインの全神経は窓の外へと向けられており、微少ながら安心感も覚えた。SH-60Kは前方に機首を傾け、猛スピードで空を突き進んでいた。

……これで何とか帰れる。そうボールドウインは考えていた。

突然、ボールドウインの背後から悲鳴と衝撃音が響いた。背部を振り返ると、コックピットを突き破った謎の物体とそれを額に受け

て身を崩す機長の姿があつた。副機長はパニック状態に陥り、隣で流血する機長の顔を青ざめた顔で見据えていた。

その瞬間、爆発が轟く。

「あああああああああああ！！！」

窓ガラスが勢い良く粉碎し、その破片を受けて三吉が悲鳴を上げる。

流血する三吉は恐ろしい光景で——顔左側に無数のガラス片が突き刺さっていた。震える身体は愕然と床に崩れ落ちている。

「ブラックジャック1。こちらブラックジャック1！」

副機長が慌てた口調で無線機越しに話す中、機体がガクツと落ちて姿勢制御が解除された。SH-60Kは空中をグルグルと回り始め、けたたましい警告音が機内中を駆け抜けた。

頭が振動で揺れる。

俺は落ちている！落ちているんだ！

眩い閃光。

怒涛の如く響く爆発音。

そして……漆黒の煙。

「バードストライク！繰り返すバードストライクを受け——」

——その瞬間、世界は真っ白になった。

終わった。

俺は死んだんだ。

ポールドوينは妙に懐かしい感触を覚え、震える身体を起こして両足を立たせた。絶望と激痛で身も心も麻痺している。

湾曲した扉を開け、ポールドوينは外に出た。視界には緑が流れ込む。

「……何処だ？」

歯を食い縛って辺りを見渡した。そこはジャングル。

ふと、後ろを振り返ると……あの奇妙な航空機が地面にめり込み、

酷く湾曲していた。ドアの窓ガラスの下で、機長の光を失った瞳が頭上の虚空を見据えている。額からは今だ真紅の血が噴き出しており、青ざめたその顔は苦痛が刻み込まれている。

操縦席の窓には、何故か1羽の鳥が突き刺さっていた。そして、航空機エンジンの原動機と思われる排出口にも1羽の鳥が深く突き刺さっているのだ。

乗員席には——誰も居ない。

ボールドウィンは捻挫した右脚を引き摺りながら、ジャングルの中を歩き始めた。この高熱下では早く誰かの救助を受けないと伝染病に感染してしまう。

ボールドウィンは手を伸ばして巨木の枝を引き千切り、それを杖にした。流石に全体重を支えられるとは思わなかったが大分楽になり、歩くのも簡単になった。

20秒後、人影を見つけた。

大木に腰を据え、地面に尻を付くその男は……あの三吉だった。顔左側に刺さる無数のガラス片。そして湾曲する身体。それらが全てを物語っている。

「うう……う……ッ！」

悶える身体を両腕で押さえる三吉の姿は悲惨だった。

ボールドウィンは歩み寄り、何とか痛みを抑えられまいかと顔に刺さるガラスを抜こうとしたが、止めておいた。そんな事をすれば出血が酷くなり、死んでしまう。

唇は青褪め、身体は震えを起こす。

絶望的状况の中、ボールドウィンはそれを見るしか出来ない自分に苛立ちを覚えた。何か俺に出来る事は無いのか!?

遂に——末期の瞬間が訪れる。

痛みが理性を押し込み、身をよじらせる。

口が開き、呼吸を始める。

徐々に唇が窄み……閉じた。

身体を満たす痛みに耐えられなくなる。

全てが脳天に達した時、三吉の目は虚ろなものとなり……沈んだ。

みよしあきこ
三吉明二等海曹。

1942年8月8日Am10:48

事故死。

ガダルカナル島。

16話 バードストライク（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

17話 変化

ジョセフ・ボールドウィンはゆっくりと目を覚ました。

幾つもの男の顔が見下ろしている。ここは？

次の瞬間、今何処にいるかをようやく思い出した。飛行場の医務施設だ。ベッドから腰を上げ、静かに体を起こす。あの空母の医務ベッドと比べると硬かったせい、背中がこわばっている。

「ようやく起きたか？」

見慣れない男。瓶底眼鏡を掛けた中年の白人。

ボールドウィンは自身の右脚を見た。ギプスで固定されている。立ち上がるうとしたが、痛くてとてもじゃないが出来ない。そして注意深く男の顔を見た。

「ボールドウィン？」

「……誰だ？」

静まり返った医務室に声がこだました。

「私はSSR科学部門部長。ルイス・オルグレンだ」

ようやく分かった。この男は俺の上司に近い人間なのだ。ふと、辺りを見渡してボールドウィンは不安そうな顔を浮かべた。

「例の日本人……どうなった？」

オルグレンは驚嘆したような顔を浮かべた。日本嫌いの男とは思えない発言だな。

「君を見つけた横で——死んでいたよ。あの航空機が墜落したのを見張りが見ていて良かったな。もう少し時間が掛かっていれば君も衰弱死していたかもしれないぞ」

不意に痛みが襲った。恐怖と激痛——それに後悔。

首を動かすと、長い緑色の袋が横の医務ベッドの下に置かれているのが見えた。ベッドの白いシートが赤く染まっている所や、アルミ皿に集められたガラス片からすると……少し前まで治療が行われていたのだろう……。

ボールドウィンは力なく枕に頭を落とし、天井をじっと見つめた。
「何も出来なかったな……」

「……教えてくれないか？何があったのか」

オルグレンは大きく目を見開きながら、ペンに手を伸ばした。そしてペン先をメモ帳に突きつける。

ボールドウィンはゆっくりと口を開いて、小さく呼吸した。
教える事なら何でもあるさ。何があるうと奴らは敵なんだからな。

1942年8月8日 pm 23:52

艦内は悲しみに包まれた。

3つの袋。それが乗員達に全てを悟らせた。

そんな乗員の前にあるのは——暗黒と絶望。耐え難い後悔。

まだ見る事が出来ず、定かでは無いが……3人は死んだ。新城は激しい後悔に押し潰され、その光景に視線を向ける事が出来なかった。タービンの駆動音が轟く通路を進むと、急に静寂が訪れた。世界が変わった事を新城は悟った。ここは普段のやまとでは無い。

混乱——死——そして、混沌。

耳慣れぬ複数の声が響いた。驚嘆する声。

「……三吉」

飛行長西村一等海尉は誰よりも悲しんだ。部下であるが故……と
いうだけでなく、彼は自身が築きたいと願う“理想の日本”創造の
賛同者だったからだ。

新城は後ろから1人の人間が静かに近付いてくる事に気付いた。

誰なのかは何となく想像がついた。

「艦長」

新城は瞬時に敬礼し、直立不動の体勢を取った。

こんな事になるとは……と倉本は思った。先刻、SH-60K哨
戒ヘリコプターが3人の遺体を米軍から引き渡して貰う為、向かい
回収した。墜落したヘリは米軍側に回収されてしまったが、遺体の

みは何とか渡して貰えた。

先刻、医官からの疑いない3人の死の要因の説明を聞き、倉本は驚愕した。機長は頭部額にフィジークイナが突き刺さり、死亡したらしい。いわゆる——バードストライク。

バードストライクとは、鳥が構造物に激突して起こる事故。主にジェット機のコックピットやエアインテークに鳥が激突し、操縦者を負傷させたりエンジンを停止させたりする。無論、それはヘリにも起こり、ローターを破壊したりする。

穩便に終わるはずだった捕虜受け渡しは最後の最後になって、失敗に終わった。

西村は今だ3人の遺体のそばにいて、殆ど理解出来ない言葉を口に出している。

「……私のミスだ」

倉本はそう呟き、3人の遺体の前に歩み出た。そして、冥福を告げる。

この事件を機に——やまとで変化が起ころうとしている。
後、ある事件が勃発する事を誰も知る由も無かった。

1942年9月10日Am11:08

満州国ハルビン郊外平房

1938年6月下旬。特別軍事地域に指定されたハルビン郊外平房一帯は、関東軍防疫給水部本部の731部隊の軍事施設が建造され始め、今日ようやく終わった。幽霊の如く存在があまり知られないこの施設では、黒い噂が飛び交っている。

21歳の男は深緑色の軍服に身を包み、両手に抱えたファイルを持って歩を進める。

ここに至る長い道程を過ぎた後、731部隊本部棟がようやく顔

を見せた。緩い襟を締め直し、人工的に染められた髪の毛はもはや刈り上げられている。

3つの縞に3つの星。

階級章に描かれたそれは、将校の象徴。陸軍大佐の証。

男が通り過ぎていくと同時に尉官や下士官がしきりに敬礼をして男を迎えた。やがて731部隊本部棟の正門を抜け、施設内へと足を踏み入れた。

『第十二課』

新たに開設された第1部の研究室では、あらゆる感染症に適應する抗生物質や血清の開発が行われており、その班長は猛スピードで出世を果たした選り抜きである。

藍畑班。

特別課の主力班であり、根幹に位置する。

731部隊の各班は大学教授や医師。科学者が担うがトマス「藍畑もまた、そんな1人に違いはなかった。未来の医療技術を用いた抗生物質開発は予想以上のスピードで進行しており、既に大半が終わっていた。その要因であったのは、藍畑が未来から大量の抗生物質を『きぼつ』での長期間勤務を見込んで持ってきていた為だった。その結果、成果を見込まれた藍畑は異例とも言える特級を果たしたが、それだけで大佐になった訳では無い。

大慶油田採掘。

土木・機械工学に精通する藍畑は油田採掘を指揮し、12月頃には初稼動が見込まれている。

更に、世界最速のレシプロ機開発にも乗り出した。理論上では条件が整えばマッハ1に匹敵するスピードを出せるそれは、1943年1月頃にも初飛行が予定されている。

全ては彼の陰謀の一環。

それは――まだ始まったばかりだった。

17話 変化（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

18話 陥落

1942年9月22日

フィジー及びサモア陥落。

ガダルカナルにて行われた陽動作戦が功を奏し、勝走を続ける事となった。ミッドウェーで沈むはずだった4隻の空母はこの作戦にあてがわれ、海上自衛隊のF35支援爆撃を受けて比較的容易に物事は進んだ。

米海軍は3隻中、2隻の正規空母を失った。

陣頭指揮を執っていたフレッチャー少将は今回の失敗を機に更迭処分寸前まで差し迫っていたが、SSRが日本軍の新型空母の存在を英国といった連合諸国に知られない為、直後に海軍長官に圧力を掛けたルーズベルト及びSSR長官ハルゼーによって取り消された。その後、やまとの支援を受けつつニューカレドンの侵攻も成功し、ハワイとオーストラリアの間のシーレーン遮断の準備が整う事となった。

しかしながら、日本軍は3島の長期間の占領を行える程の余力も無い為、新たな策を講じる必要がある事を確定し、大本営内では論議が問われる事となった。

1942年9月24日

SSR『YD』審査会開催。

ボールドウィン少佐の目撃した日本新型空母の証言。

哨戒機が撮影した白黒写真。

ガダルカナル島で回収された謎の航空機。

これらの観点より新型空母の概要をOSS、NACA、海陸軍に

よって論じ、予測するという会合が審査会の根幹である。

明確な証拠と脅威度の査定も同時に行われており、その結果としてSSRは異例とも言える予算を入手し、海軍内での影響力も確保出来る様になった。

長官ハルゼーは新規軍事作戦の立案を発表し、来月にも行えるようにと大統領に嘆願した。

結果、米軍によって掌握されたガダルカナルの飛行場がSSR直轄下の軍事基地として確保され、大規模な航空戦力の投入が比較的容易になった。

四章『FS作戦』 完

18話 陥落（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

五章『西亜作戦』 19話 印度の危機

1943年1月11日pm14:23

アメリカ合衆国ワシントンD.C.

ペンシルベニア通り1600番地に位置するホワイトハウスは、アメリカ歴代大統領達に使われてきた官邸としての意義を持ち、その風貌は壮麗としか言い様が無い。建物の色である白の由来は米英戦争中、英軍の焼き討ちを受けて炎上し、職員達が焼き討ちによる焦げの汚れを何とか誤魔化そうと白塗りにした所から来ており、本来の名前は『行政府官邸』である。

海軍作戦部長のアーネスト・キングは右脇に一通のファイルを挟み、勢い良くレジデンスに駆け込んだ。随時巡回を行うシークレックト・サービスに挨拶をしつつ、コロナードと呼ばれる渡り廊下から姿を覗かせるローズ・ガーデンに目を瞠りながらウエストウイングに入った。

その一角、白塗りの扉を開けると、大統領執務室が視界に流れ込んできた。

フランクリン・ルーズベルト大統領は黒革張りの椅子に腰を埋め、窓に映り込むサウス・ローンを虚ろな目で見据えていた。

「……キング」

耳に響くルーズベルトの冷淡な声は、キングに畏怖感を覚えさせた。

「大統領閣下、イギリスが支援要請を迫っています」
支援など……無理だ。

ミッドウェー敗戦後、アメリカは劣勢に立たされていた。太平洋戦線における基盤確保を優先化したルーズベルトは英国に対する新型のM4戦車300両の提供を中止。また、航空機等の貸与も最小

限に抑える事を決定し、英軍は第二次エルアラメイン会戦においてロンメルは機甲師団による防衛線を強化。自身が不在の時にも何とか耐える事ができ、結果として会戦はドイツ側の勝利に終わり、後のトーチ作戦にも大きく影響する事となる。

今のアメリカにイギリスを支援する余力は無く、太平洋戦線で手一杯だった。

しかし、外交的観点やドイツの事を考えれば、やむを得ない問題でもある。

「何の支援だ？」

「インドの英軍支援です。独立運動が激化しているとの事で、また1つ問題が増えたな。」

「中国の事を考えれば……か？」

「オーストラリアの事もあります。日本軍はシーレーンを遮断しておりますので……」

「英国は過去の遺物だよ。戦後はどうなるか見物だな」

確かにそうだ。とキングも思った。イギリスは旧式兵器や植民地兵での防衛で日本やドイツに勝利出来ると確信していたが、マレーやアフリカにおいて敗退を重ね、今やアメリカに依存している。

「何にせよ、中国への補給路の1つが断たれれば我々も危うくなる。支援は検討するべきだな」

ルーズベルトはそう呟きながら喉を唸らせ、キングの目を見据えた。

同日

ハワイ／オアフ島

SSR司令部

「……何とかあの空母を撃沈出来ないのか？」

ハルゼー中將は複数の資料に目を通しつつ、憤りを募らせながら

オルグレンに訊いた。

「違う」オルグレンは声に出して言った。「奴は怪物です」

今日、米海軍や陸軍でとある“伝説”が蔓延している——『怪物空母』。それ以上でもそれ以下でもない。ただの伝説に過ぎないと思う者も言えば、真実だと言う者もいる。大統領は嚴重な情報統制を敷いたものの、やはり情報漏洩は完全に防ぐ事が出来ないようだ。

「怪物もあるが……例の航空機は？」

「未だ解析は進んでいません」

あのガダルカナルに墜落したSH-60K哨戒ヘリは米軍に回収された後、SSRの科学部門で解析が試みられ、結果としてドイツで確認されたフォッケアハゲリスFa223に構造が似ているとの見解が出たのみである。

「怪物と言えども、心臓を一突きすれば楽に殺せるはずです」

オルグレンは笑みを浮かべながら言った。潜水艦ガトーの雷撃が5発直撃したというのが全く損失を受けていない点と、ボールドウィン少佐の証言を結び合わせた結果として、装甲自体が非常に強固なものであるというのが科学部門の見解だ。

しかし、局部を集中的に攻撃すれば、撃沈も不可能ではないかもしれないとオルグレンは予測していた。

「実際、何がいる？」

「サウスダコタにワシントン。それに航空戦力を100ほど」

サウスダコタ、ワシントンは米海軍の新鋭戦艦。主砲たる40・6cm砲は脅威的だ。

現在、両艦はガダルカナル島に配備されており、同時に航空戦力もヘンダーソン飛行場に多数配備されている。

ガダルカナル戦後、疲弊したロバート・L・ゴードン中將の後任として南太平洋部隊司令官に就任したハルゼーにとって、同艦投入は容易とも言え、実現できない事はないとしてオルグレンは嘆願した。

「そこまでの戦力が必要なのか？」

「はい、これでも足りないかも知れませんが……」

「それでもか？」

「空母の装甲がどの程度かが理解出来ない以上、予備戦力も必要になるかも知れません」

ハルゼーは一瞬、身を強張らせた。そんなばかな。たった1隻の空母にそこまで必要なのか？

「並行してインド洋での日本艦隊との戦闘も継続せねばならないのを配慮した戦力数です」

そう言いながら、オルグレンは数枚の書類をハルゼーに手渡した。SSR科学部門が割り出した新型空母に対する対抗戦力の相当データ。それに有効戦法。

ガダルカナルの戦闘から、航空戦力は確実に必要であるとSSR全体が理解しており、航空隊は急降下爆撃機を中心に構成されている。

「望む事は同じだ……怪物空母の撃沈」

ハルゼーは拳を握り締めながら言った。

「まずはサインを」

オルグレンはそう言い、今作戦の了承を得る為の書類とペンを差し出した。ハルゼーは渋い表情を浮かべながら、ペンを手に取り――サインをした。

「作戦には何も支障はありませんよ、中将」

オルグレンは言い、重々しいハルゼーの顔を見返した。「無事、沈むはずです」

五章『西亜作戦』 19話 印度の危機（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

20話 音を越えるレシプロ―蒼雷

1943年1月12日Am10:09

満州国大慶近郊

関東陸軍特務機関専用飛行場

土道で舗装されていない第二滑走路は、今し方地上より飛び立った銀色の飛行機を啞然として見上げる陸軍兵達によって埋め尽くされていた。入道雲の中に潜り込んだ1機のレシプロ機は、前方より叩き付けるが如く吹き荒れる風は大慶油田からの蒸気で熱くなっていた。

濃い黒煙がレシプロエンジンより静かに漏れ出す。

パイロットの山瀬大尉は、予想を超える機体のスペックに驚愕し、思わず口を開けた。現在の最高速度は……時速989キロ。零戦でも533キロかそこらだ。自然と手は震え、Gが体を襲う。

「ぐッ……!!」

沸立つ速度に終わりは無いのか？

地面に対し、白鳥のように丸くうずくまっていたこの機体を始めに見た時、それがこんな速さを兼ね備えようとは夢にも思っていなかった。馬鹿馬鹿しい考えだが……これがこの陸軍の製造した戦闘機とはとても考えられないのだ。

今日の朝まで感じた航空機の間接感がどしどしと崩れていく……。

この機体には何か特別な――魔力でもある。雲が渦を巻いて乱れ、青々とした空が視界の中に流れ込んできた。

「……嘘だろ」

現在の時速、1200キロ。

その速さは――音速に近い。

ついに重要な一線を越えてしまったようだ……。

「大佐、あの性能は十分過ぎますよ」

陸軍技術少佐の冴川は右隣に立つ童顔の大佐に向かって言った。

蒼空を駆ける銀色の戦闘機は、冴川のみならず多くの将官に満足感を与えていた。最近では海軍が勝利を続けている為、これが戦場を駆ければ注目される事間違いないだろう……。

「こんなものじゃないさ。条件が整えば音速に到達する」

深緑色のロングコートを着た童顔の大佐は、腕組みしながら眉間を顰めていた。

「しかし、あれは成功だと思いますよ」
成功……か。

カーボンモノコックを利用したこのレシプロ機は、予め採掘施設『きぼう』に隠しておいたレシプロエンジンと炭素繊維を応用した今世界最高峰の戦闘機だ——もっとも、F35は例外だが。

きぼうは『やまと』同様、カタクラフトシステムによってタイムスリップした。藍畑は事前にレシプロエンジンとカーボンモノコック、そして金の成る木……何十キロにも及ぶ金塊を隠しておいた。731部隊に入ってから以降、新設された帝国陸軍の未来技術の統括機関に属しつつ、未来情報や技術を流す代わりに『きぼう』の統治を要求し、獲得した。

それまでの道は長かったが、偽装用の化粧道具一式の入ったアタッシュケースと——未来から持ってきた金塊数千口分入りアタッシュケースが役に立った。いつの時代も金がモノを言う。

「試作機は後3機造っています。それに生産ラインも整いつつあります」

「そうか……なら西亜作戦までには間に合うな」

ようやく未来改変の扉が開いてきた。藍畑は静かに頷いた。

D0335をベースにカーボンモノコック、改良型レシプロエン

ジン。それが音を越える事すら可能であるという大日本帝国陸軍の戦闘機『蒼雷』の正体だ。カーボンはフォーミュラー1カーにも採用されている素材で、強度こそ弱いものの、その軽さはお墨付きである。モノコックだけでも1t相当の機体軽量を果たしている。

とは言え、コスト面は馬鹿高い。

生産ラインに必要な資材は『きぼう』実験棟にあったが、量産には時間が掛かる。

「それ程時間は掛かりませんよ」

冴川がそう話す中、蒼雷は第二滑走路へと離陸した。

蒼雷付近には黒煙がたなびいている。機首の銀色の艶やかな表面は、黒煙によつて煤を被ったかのように黒く光っていた。また、機首プロペラ付近では、火のついた花びらのように、火の粉が輝きを散らしながらゆっくりと落ちていった。

刹那、唐突にキャノピーが音を立てて開き、パイロットの山瀬が降りてきた。

「大尉、気分は？」

歩み寄つてきた冴川が山瀬に訊いた。

「凄いですよ。今までに感じた事が無い速さを感じましたね」

山瀬は息を呑み、言った。

体は未だ、体験した事の無い速さを覚えている。

そんな中、藍煙が近付いてきて、山瀬の左隣に立った。襟元の階級章は大佐である事を無言で告げる。藍煙は山瀬の横を抜けて前に出て、蒼雷の機首に2本の指を伝わせた。

しばらくすると、何も言わずに振り向き、待たせてあった軍用車両へと歩を進めていった。

20話 音を越えるレシプロ―蒼雷（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

21話 帰国作戦

1943年2月15日Am01:28
インド洋

……敵の駆逐艦は近付きつつある。

伊号第19潜水艦艦長の木梨鷹一中佐は、7月付けで伊19に就任し、ガダルカナル方面で極秘作戦の援護を担い、やまとを守っていた。木梨指揮下の伊19は、駆逐艦1隻、SSR配下の潜水艦1隻を撃沈した。

伊19の今回の任務は、大事な積荷の配送。

潜望鏡を見据える木梨の後ろに、その積荷となる人物は居た。

スバス・チャンドラ・ボース師——次期自由インド仮政府首相——国家主席——は、やや黄みがかったカーキ色の質素な軍服に黒縁眼鏡という風貌で、その2つの瞳は——輝いていた。

神奈川県、横須賀軍港を出発して数十日。敵は航路によく出没している。恐らく、何処かから作戦の情報が漏れているのであろう……。

ボースは真昼に燦々と昇り輝く太陽が恋しかった。

艦内には、乗組員の体臭と、エンジンから漏れ出す焦臭が充満しており、目を開ける度、その臭いがきつくなっているのを感じた。愛しいインドに戻るのは何時の事だろうか……。

この聖なる帝国海軍の艦内は暗く、不味い空気が漂う。

ボースが、薄汚れた机上に置かれたブリキの缶詰をフォークでかき混ぜる中、乗組員の1人が叫び、艦内は騒然となった。木梨中佐は潜望鏡下げを命令し、巨大な鉄筒が床上より伸びてきた。それから木梨はその2つの瞳を静かに潜望鏡のレンズへ移し、照準を海面上に合わせた。

敵は米国艦が2隻。

天はまだ暗黒に包まれており、茫洋の海の先に敵艦2隻が見えた。距離は2000m。

魚雷は4発、伊19は大型潜水艦で最高17発が搭載可能だが、大半は航行中、遭遇した敵艦の為に使用していた。

「対艦戦闘用意!!」

木梨中佐の声と同時に場は鋼鉄を踏む足音と駆動音に包まれる。ボースは居室へと戻され、指揮室のの扉は固く閉ざされた。

2月15日、午前1時40分、伊19は敵艦2隻を発見。

1つは米駆逐艦『ラドフォード』と判明。SSR指揮下の艦だ。接近後、2隻目がセントルイス級であると分かるのには時間掛からず、それが軽巡洋艦『ヘレナ』であるのがようやく確認出来た。

「注水開始!」

木梨の声は艦内に轟く。

潜望鏡の把手を確りと握り、敵軽巡に焦点を合わせた。場所はベングアル湾。オンバイ海峡を抜けたシベルト島の近隣海域である。

数十フィートに及ぶ暗い艦内の中央通路を進む中、ボースは両脚に流れる衝撃を感じ取った。左右へと一直線に走る轟音と衝撃は九三式酸素魚雷の発射を告げていた。魚雷は恐らく、4発。

魚雷は、その性質から航路を残さず、目標に向かって突っ走る。当たれ当たれ当たれ……。

ボースは足を止め、胸の中に呟いた。そう願うのは乗組員も一緒だ。

固唾を吞んで待つボースの耳に、4つの命中音が響き、暗闇の先から小さく満足気な吐息が流れ込んで来た。どうやら命中したらしい……。

「潜望鏡下げ」

木梨の声と共に潜望鏡が床に収納される。

4発の魚雷の内、3発が軽巡『ヘレナ』に直撃した事を受けてだ。……とは言え、まだ駆逐艦が残っている。だが、魚雷は残り数本なので、温存の為に確実に敵艦を仕留められる環境を整えなければならなかった。

伊19は深度100m地点まで潜水、敵駆逐艦より逃れるべく、隠れた。

ボースはまた、歩き始めようとしたが、再度足を止めた。鼻孔には腐臭の鋭い空気が伝い、天井と壁が大きく揺れた。

360度、あらゆる方向から爆発音が響く。

それは魚雷発射から3、4分後のことで、2発、3発と敵駆逐艦の爆雷音が響き、艦体を揺さぶった。

ボースは進む衝撃を体全体を感じ、周りを見渡した。

木梨は、直立不動で待つ。

……1発の大爆発。

「潜望鏡上げ！」

木梨は異変に気付いたのを感じ、潜望鏡の把手を取った。

レンズ越しに見えてきたのは――轟沈する1隻の駆逐艦。空には1機の戦闘機が飛んでいる。

「未確認の航空機1機を確認。司令部へ問い合わせてみる」

木梨がそう告げた後、4分後に返答を握る通信兵1人が歩み寄ってきた。

「確認しました所……我が軍の新鋭戦闘機……との事」
「機種は？」

木梨の問いに通信兵は戸惑いを覚えた。

「それは報告されていません」

まあいい……。

そう胸の中に呟いた木梨は、浮上を命じた。軽巡と駆逐艦乗員を救助せねば。

少しの間、潜航を続けた後2時10分頃、水面に出て救助活動を始めた。駆逐艦は完全破壊されており、生存者は限り無く少なかった。

捕虜を出来る限り收容した後、伊19は出発。

午前8時、ベンガル湾内に到着。積荷引渡し地点は、日本海軍の新鋭空母だった。

『やまと』

そう船体に書かれた文字は、幾分か塗装がはげていた。

艦橋に上がったボースもその文字を見た。

「……ありがとう」

ボースはそう言いながら、木梨中佐に敬礼した。同時に、木梨も敬礼する。

こうして、伊19は1つの任務を終えた。

21話 帰国作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

22話 選択

1943年2月15日pm06:29

護衛艦『やまと』

ブリーフィング室

「……作戦概要としては、まずAEWを用いた策敵の後、敵の脅威度の少ない航行ルート上にチャンドラ・ボースを乗せたSH-60K——コールサイン『ブラックジャック2』を展開。2機のF35による空中哨戒の中、インドへと送り届ける……というものである」

倉本艦長は更に、話を続ける。

「当作战には、インド国民軍、中国共産軍も加わっている」

「中国共産軍ですか？」

新城三等海佐は動揺したような声で言った。共産軍は事実上、敵対関係下にあるはず……。恐らく、自分達の知らない誰かによって、歴史が変えられている——ようだ。

「同時に、我が艦は敵艦隊の中央に向かい、3分間……」

口籠る倉本に対し、新城は嫌な予感を覚えた。

「……3分間、単独で突入し、敵艦隊に甚大なダメージを与える……との事だ」

それは史実の戦艦大和も同じ。いわゆる特攻。この航空機搭載型護衛艦『やまと』には、カタクラフトシステムが搭載されており、最大4分までは防御を持続出来る。

とは言え、それは自殺行為だった。

無論、弾薬の問題もある。」

「弾薬の浪費は避けるべきかと……」

「その点に関しては心配無い様だ。あのタイムスリップ前、展開していた第1護衛艦群の艦艇が、採掘施設『きぼう』と共に発見されたそうだ。そこで弾薬を補充出来る」

「では生存者も？」

「海上自衛隊に生存者は確認されなかった。見つかったのは艦艇のみで、『きぼう』内作業員のみ生存が確認されている」

第1護衛艦群の艦艇の大半は壊滅されていたが、無傷な弾薬は多数発見されている。その結果を踏まえた為、大本営は無茶な作戦を決定させたのだ。

3分間……。

何とも短い時間であるが、一歩間違えば——死さえありえる。

今作戦では、F35は予備機を除く60機近くが出撃し、ハーブーンやLJDAMを出来るだけ搭載して挑む事になっている。第1護衛群には補給艦も付いていた様なので、生鮮食品や人間を除いた兵器の補充が行えるが故の行動だった。全ては3分間を耐える為……。

この作戦を呑まなければ、大日本帝国からの物資補給を打ち切られてしまう。

そうならない為にも、作戦行動前に1隻でも多くの艦艇を撃破し

なければ……。そう倉本は考えていた。

「命を優先するか……。それとも未来を保証するか……」

どちらにせよ、危険を伴う。

物資が尽きれば乗員5000人は飢え死に。遂行すれば、撃沈もあり得る。

いつその事、やまとを独立国家と表明し、別国に侵攻して食べ物と資源を奪ってみようか……。

いや……。それは海賊か。

選択に迫られる倉本の脳裏には、複数の案が浮かぶ。

作戦開始まで——後3〜4時間。

——引く事は最早出来なかった。

22話 選択（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

23話 やまとの意志

1943年2月15日 pm 19:04

ブリーフィングを終えた後、新城三等海佐は艦内のスロープを駆け下り、鋼鉄の扉に拳を打ちつけた。2回、軽快で単調な金属音が鳴り響いた。ぐずぐずしてはいられない。戦闘開始は翌朝。話す事はたくさんある。

「……失礼します」

背を伸ばし、新城はまっすぐ艦長室へ進み入り、倉本の前に歩を置いた。

ノートパソコンの前に腰を下ろして、ログイン操作を始めた倉本は視線を上げ、新城の姿を見た。

「何か用でしょうか？」

「……ああ、1つ聞きたい事がある」

倉本は手の平で机前に置かれた椅子を指し、新城はやや慌てながら腰を埋めた。2月とはいえ、気温は28度近くなので、背部の空調設備は稼動していた。エアコンの冷たい風で新城の着る上衣がはためいていたので、やや寒さを感じて暖を逃すまいと両腕で体を掻きいだいた。それを見た倉本は、空調温度を2〜3度程上昇させた。

「3分間の特攻……いや、戦闘行為についてどう思っ？」

新城は身を硬くした。それを聞くのか……。

「大本営は、海軍機動部隊の損失を最小限に抑えるべく、この艦を一種の囫として使うというのは分かっています。それでF35やフラнкクスで敵艦や敵機は多数倒せるはずです」

「乗員の危険も承知しているな？」

無論です……出来れば作戦は中止したい。

そう言いたかったが、理性は本能をねじ伏せた。

「分かりますが、拒否すれば支援は受けられなくなります」

新城が言葉を切る中、机上のノートパソコンが動き出し、先刻送信したEメール——の返答文が、淡く画面に表示された。刹那、倉本は小さな不安に息を詰めて、坐する腰を思わず上げてしまった。それを読み解く事に対し、彼はやや不可能にも思え始めていた。液晶画面の光源に浮かび上がった倉本の顔は——無表情だった。

「今、意見が届いたよ」

倉本は言い、ノートパソコンの画面を新城に向けた。

『アンケート統計』

内容は、“インド洋における作戦に対する意識調査”。各部署ごとに行われた調査は、その後処理が行われ、%で示された。

その概要は賛同72.3%、反対27.7%。

どちらでもない……という項目は除かれている故、事実上の賛同者が多いことになる。匿名ではあるものの、病状者を除けば全員が参加している。

「これが——“やまとの意志”？」

「ああ。そういうことになる」

倉本は画面を自分の前に戻し、それをしげしげと眺めていた。

「私……は今、選択を迫られている。今の時代、その中における“海上自衛隊”の意義についてだ。人の心を操る事を、人が行う事は完全には出来ない。人間はその時代、環境、現状の中では、進化も退化も出来る」

倉本は言った。

「意志は優先しなければいけません。とは言え、1人1人の思想も大事ですが」

「もちろん。だが、この戦時の中、君はこの作戦に賛同するか？」
「……私は、この世界の中では、人命も大事ですが順応性も重要と思っています。専守防衛の中、戦時世界という2つの矛盾を抱えるこの空母とも護衛艦とも言うべきフネ——やまとの艦長たる貴方は、本来与えられた権限によって選ぶ事が出来るはずです。乗員の意識が統計上、上回っていたとしても、最終的な判断は貴方の仕事では？」

新城はそう言い、二言目の発言は止めた。何も言う事は無い。

「……しばらくは安泰だな」

倉本は満足気な吐息を漏らしながら、言った。徐にノートパソコンを閉め、新城に向き直った。

「私の命はそう長くないのでな。次の責任者として相応しいか確かめたかったんだ」

「命？一体どういう事です？」

新城はそう訊いたものの、倉本が発言する事はなかった。同時に倉本が退室要求を示した為、その日はここで終わりを告げる事となった。

23話 やまとの意志（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

24話 セイロン島襲撃

1943年2月16日pm03:17

セイロン島南東近海

赤城を中心とした第1航空戦隊、飛龍・蒼龍を中心とした第2航空戦隊、翔鶴・瑞鶴を中心とした第5航空戦隊を統括する南雲機動艦隊は、オンバイ海峡を抜けてセイロン島南西に展開していた。加賀は損害著しく、今作戦には投入されずに修繕に入っている。

本来、ミッドウエーで沈む運命だった3隻は艦隊主力であり、セイロン島攻撃を担う。

それを待ち受けるは英軍東洋艦隊、そして米軍機動艦隊である。

2艦隊はやまとの電子妨害によって艦隊主力を確認出来ずにあつた。1942年4月上旬、日本軍は英国東洋艦隊主力を撃ち漏らしている。南雲長官は今度こそ壊滅に追い込む為、前作戦からの反省を踏まえつつ、1隻少ない5隻の正規空母で挑む事になるが、前回とは違って虎の子の中の虎の子的存在『やまと』がある為、大丈夫だろうと踏んでいた。

敵司令官はJ・サマウィル中将。

かつてのセイロン沖海戦で南雲と一戦交えた人物であり、敗北を喫している。その為、南雲主力の今作戦を察知した米軍よりもたらされた情報を聞くや否や、徹底した防衛線の構築を命じ始めた。

彼にとって、今回の戦闘は一種のリベンジとも言えるのだ。

1943年2月16日Am04:08

F35は激しい轟音を響かせながら、次々に甲板を蹴って漆黒の空に飛ぶ。

やまと第1攻撃隊の数は38機、東洋艦隊を瞬時に抹消するには十分な数だ。

最初に飛び立った河合一等海尉はヘッドマウントディスプレイ越しにベンガル湾を見た。前方には、月が第1航空戦隊の秩序溢れる艦隊群を照らし、長い影を投げかけている。右舷より降って来る友軍のF35のエンジン音や風を切り裂く音は遠く聞こえ、狙いはセイロンのみに絞られた。

河合はセイロン島東岸のやや北部に位置するトリンコマリー軍港の空爆を任されており、半分はコロンボ基地を襲撃する手筈になっていた。

また、第2攻撃隊は英軍航空基地を攻撃し、沈黙させる。

3つの拠点を撃破すれば、制海権と制空権を握る事ができ、日本軍には非常に有利になる。

東の地平線より太陽が少しだけ顔を覗かせる中、河合のF35はセイロン島の陸地に入った。トリンコマリー軍港は目前に迫っており、F35は轟音を響かせながら上空に入った。

エンジン面の問題から、F35は非常にうるさい。

その為、作戦は迅速に行う必要があった。

「アレス1、コンタクト」

河合はヘッドマウントディスプレイ越しに告げ、目を凝らした。見通しの良い軍港湾内は微かな朝日を浴び、十数隻程の艦艇の姿が露になった。湾内の暗い海面には1隻の巨大な空母の姿があり、艦尾のみが光の帯を巻きながら、輝いている。

「アレス1、敵の存在を確認。空母2隻、戦艦3隻、重巡1隻、軽巡2隻、駆逐艦7隻……」

河合はそう告げ、液晶パネル越しに艦艇群を見つめた。

『こちらヤマト・コントロール、交戦許可』
「Wilco（了解、命令実行）」

機首のAN/APG-81 AESAレーダーは空母インドミタブルを捕捉し、液晶ディスプレイにその姿が映り込んだ。河合は高度をサイドスティックで維持しつつ、機首下面のEOTSからレーザーを照射し、その目標をインドミタブルの飛行甲板上に合わせた。そしてそれと同時に、湾内はF35の鋼の洗礼を受ける事となる。13機のF35から発射される20個のLJDAM弾と6発のハープーンミサイルが、精密に湾内の15隻近くの艦艇を引き裂いた。刹那、海面上の四方八方で、空を突き破るような轟音が響き渡った。艦橋や砲身が爆発の衝撃で崩れ落ち、残り火を燦らせる廃鉄まみれの瓦礫の山と化したのだ。突然、湾内に熱風が吹き込んで渦を巻き、軍艦や空母は呆気無く崩れ去って沈む。

——10分という短い時間の末、英国東洋艦隊は半分近くの戦力を失ったのだ。

24話 セイロン島襲撃（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

25話 セイロン島制圧

数ヶ月前。

ダーウィンは既に夏を迎えている。

この街は1942年2月以来、度重なる空爆を受けていたが、米国の支援や住人達の復興によって大半の港湾機能は、復旧している。急遽編成された米海軍機動部隊はこの街の軍港で補給を受ける。

連合軍艦艇の並ぶポートダーウィンには、SSR指揮官のウィリアム・ハルゼー中将の姿もあり、同時にSSR科学部門部長のルイス・オルグレンの姿もあった。前述したが、2人はかつて駆逐艦ベインハムで上官と部下の関係であり、共に艦艇の上で並ぶのは第1次大戦以来の事だった。2つの影は戦艦ワシントンの艦橋に投影され、眩い夕陽がそれを焼き付ける。

ハルゼーは普段とは似合わない神妙な顔で立ち、その斜め右にオルグレンが立っていた。

「……こうすると、第1次大戦を思い出す」

桃と杏と金色の光の帯を引く2隻のエセックス級空母に目をやりながら、ハルゼーは言った。

「今の事を考えると、まだ第1次大戦時代の方が良かった。日本機を見なくて済む」

そう呟くハルゼーの表情は、哀しげだった。

1942年6月のミッドウェー以来、米海軍は劣勢の中にある。その大きな問題は日本海軍の新鋭戦闘機であり、対抗するハルゼーは元々パイロットの資質も無く、40歳を過ぎて教育訓練を受けたが、それも空母艦長職を欲しての事である。とは言え、空の事は理論や経験から理解してはいるものの、常軌を逸したあの戦闘機はノイローゼになる程、嫌な存在だとハルゼーは内心、思い続けていた。

「あの古き良き時代……にですか？」

オルグレンは言った。第1次大戦時、彼は20代半ば。ハルゼーは30代を過ぎていた。戦時特例中佐なり立てのハルゼーは、少尉となつて幾分もいかなないオルグレン同様、戸惑いの中に居た。

「別に良きとは思つていないがな」ハルゼーは唸るように言った。
「まあ……あの怪物空母がいる以上悪い……とは言えないか」

「奴はインド洋に沈みますよ、この戦艦ワシントンとノースカロライナの2隻で」

1943年2月16日Am04:49

セイロン島

南雲長官の命令一下、セイロン島の英軍東洋艦隊や航空隊は殲滅された。F35大編隊が一方的にトリンコマリ軍港、コロンボ基地、英軍航空隊基地を襲撃、一瞬にして壊滅させる事に成功した。

これにより、制空権・制海権は日本軍の物となる。

その頃、インド内ではスバス・チャンドラ・ボース扇動の元、国内で大規模な独立運動の加速が始まり、同時に陸軍・インド独立軍は国内へと侵攻。殆ど奇襲の形となり、成功するが、これもやまとから齎された情報の元、日本軍内で使用されていた暗号の一新である。

日本軍は標準的な日本語でなく土佐弁仕様の日本語を用いる事を決定、更に暗号の一新を極め付けにしているのだから米軍も英軍もたまらない。

その解読は、天文学的な組み合わせの元、考案されたエニグマよ

り難しいとも言える。

何しろ、元々難しい言語である日本語に加え、非常に強い訛りと独特な言い回しをもつ土佐弁は、資料が無ければ、コンピュータを導入してやっと解読したエニグマよりも難しい。

東洋艦隊壊滅後、日本海軍は島内に大規模な爆撃を開始した。

港湾地域への大規模攻撃から逃れたサマービル中将は止むを得ず、コロンボ基地近郊に位置するセイロン島守備隊本部に籠城、米海軍機動部隊に対してコンタクトを開始した。

その頃、米機動部隊はセイロン島より600海里程離れたモルデイブ諸島の英軍基地に潜伏し、攻勢の合図を待っていた。

基地の通信士は、焦りの混じる守備隊員の声を聞き、すぐに上層部へ報告。

こうして、米機動部隊は出撃の時を迎える事となった。

その頃、艦隊を失ったサマービル中将は日本軍上陸を恐れ、内陸部へと撤退していた。既に制海・制空権を完全に奪取されていた守備隊に出来る事と言えば、米機動部隊の増援到着まで島内での徹底抗戦を構え、内陸に建造された籠城基地に籠る事だけだ。その内、艦爆や艦攻による猛烈な爆撃や、戦艦等を用いた艦砲射撃が飛び交うようになり、一度セイロン島は穴だらけになってしまった。

1943年2月16日Am10:08

日本軍はコロンボ・トリンコマリーに上陸。

そこで一同は壊滅した敵艦の姿を見て圧巻された。大半は打ち砕かれて海域を漂流しており、外装は黒く焼け焦げているようだった。その内『インドミタブル』空母1隻、駆逐艦数隻は鹵獲され、後に使われる事となる。

2カ所の上陸地点では、指揮官を失ったインド兵が慌てた様子で反抗してきたが、すぐに降伏してほぼ無血上陸となった。

そんな中、日本軍は島内情報攪乱の為、やまとの設備を用いて妨害電波を発信、島内の情報網の寸断に成功した。守備隊司令部であり、サマービル中将の隠れる内陸部の基地は完全孤立してしまうのだが、それだけでは済まなかった。やまとは電波ジャックし、スバス・チャンドラ・ボースの肉声演説テープを流した。内陸部の基地内にはそのテープが流れ、イギリス人に縛られるインド兵達は愕然としてそれを聞き入っていた。英雄の帰還だ。

その結果、1つの事件が発生した。

イギリス人将校の1人がラジオ演説の視聴禁止に抗議するグルカ人兵を射殺したのだ。

元々、傭兵であり、誇り高き民族であるグルカ人はこの行為に対し、武力を用いた抗議を開始。チャンドラ・ボースの到来と長年に渡るインド独立運動を思い出したインド兵が反乱を起こした為、守備隊は内部から総崩れとなってしまった。

無論、それはインド全土も同様の事である。

扇動されたインド兵は武装蜂起し、日本陸軍とインド独立軍と共謀して、大規模な反抗運動を始めるのだった。

25話 セイロン島制圧（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

26話 セイロン沖海戦

1943年2月17日Am06:08

セイロン沖

艦長の倉本一等海佐はやまとのCIICより、杏色に染まる甲板から発進するF35の大編隊を見ていた。“3分間”の間、航空機を空に上げる事により、敵艦撃破と被害を最小限に抑える為だ。背部には日本軍の空母3隻が座し、やまとの特攻攻撃を見物する様子。

本艦に艦載されたF35の総数は80機近く。

そこに空母5隻から発進した艦戦・艦攻・艦爆群が加わってくる。事前にF2C早期警戒機が空中哨戒を行っているので、米機動部隊の座標や、敵戦闘機が多数発進した事を確認していた。F35はありったけの対艦兵装で敵艦を撃沈する。

米機動部隊はエセックス級空母『エセックス』『ヨークタウン』2隻、ヨークタウン級空母『エンタープライズ』1隻、護衛空母2隻を軸に戦艦『ワシントン』『ノースカロライナ』2隻と重巡、駆逐艦から成り、周辺の航空基地からも支援機が出動している。

つまりは、総勢500機近くの航空戦力が相手である。

ヨークタウンは前級空母が多数喪失された事を受け、作業を急がせた結果、史実よりも早く参入する事が可能となっている。

SSR指揮下の航空戦力は100機。

また、戦艦2隻も相手を行う。

これらの大艦隊を相手に、日本軍はインド洋制圧作戦を開始するのだ。

26話 セイロン沖海戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

27話 緒戦

1943年2月17日Am06:48

セイロン沖

まだ暗い海面を、唐突に響く濁った音響を立たせ、1隻の空母――やまとが猛進する。黒いガラスのように滑らかな海面にはさざ波と波紋が渦巻き、水がそれまでとは違う音を立てて艦体を鋭く殴り付けたのだ。やまとはほかの音を掻き消すような凄まじい音とともに突進していき、その速度は収まる所を知らないようだった。昇つて間も無い朝日は、やまとの艦体を輝かせる。

その上には、無数の日本軍機。さらにその先には、F35が大編隊を組んで空を進んでいた。

やまとCIC。

艦長倉本はディスプレイに投影された外部映像を眺め、海面を浮かべていた。

「敵航空戦力は？」

「200余りです」

副長新城がそう答えた後、倉本は神妙な表情で俯いた。

「敵より3000m付近に入った後、カタクラフトシステムを起動せよ」

戦艦ワシントン。

SSR司令艦であり、機動部隊旗艦であるこの艦には、猛将ハルゼーとSSR科学部門部長のオルグレンが搭乗しており、日本の怪物空母撃沈作戦に従事していた。空には日本の新鋭戦闘機があり、既に航空戦力に対し、多大な損失が報告されている。

2人が艦橋で作戦案を話し合う最中、ふいに轟音が聞こえてきた。同時に、最前線に展開していた重巡の横腹に巨大な水柱がそそり立ったかと思うと、その合間より紅蓮の炎と黒煙が艦左舷より漏れ出している事を確認出来た。敵の攻撃だ！やつのことで保っている体勢は2発目の攻撃によって崩され、重巡は3回の爆発を起こして沈んでいくのだった。ハルゼーは双眼鏡から、すりりとした白い体躯を持つ矢のような飛翔体を確認し、それが敵の兵器である事が分かった。ハルゼーは思わず片腕を上げ、力任せに右の拳を艦橋の壁に殴り付けて憤慨した。

「あの化物相手にどうする気だ？」

SSR司令官でもあるハルゼーは、部下のオルグレンに訊いた。少なくとも、認めたくは無かったがハルゼーはあの艦の戦闘能力を相手では、この規模では1日ともたないような気がしてならなくなり始めた。

「敵空母は強靱な装甲……及びバルジを持っていると思われます。そこで敵をなるべく引きつけ、貴艦とノースカロライナ2隻の水平射撃で敵艦の手前に砲弾を落とし、滑らせて貫通させる他ないでしょう」

オルグレンは渋面を浮かべつつ答えた。

これを実際、行うともなればかなり近付く可能性がある。過去にSSR指揮下の潜水艦『ガトー』の戦闘から、敵は高い対潜能力を

有している事も分かっているため、接近は自殺行為にも等しい事である。

しかしながら、今はこれ以外に手段が無い。

刹那、遠方から重なるような爆発音が響いてきた。

戦艦ワシントンは、やまとより11キロ程離れた地点に展開している。轟音は滞り無く響き渡っていて、その度乗員達の恐怖の色は強まった。

A m 07 : 03

米機動部隊の最前線部に到達した倉本はCICより外部の状況を見据えた。F35及び日本軍機の猛攻を受けた米艦の大半は大破や沈没したものが多く、米側にしてみれば壊滅的被害だ。

重巡の横を通り抜ける中、倉本の脳裏に乗員達の顔が過った。

胃がぎゅつと締め付けられるような気がした。

これは何なのだろう——畏怖か？不安か？それとも別の何かか？

……何故だろう？

倉本の前部で、激しい爆音が響いた。はっとしてディスプレイを見ると、敵の生き残った戦闘機が爆弾を落としたのが分かった。計2発の爆弾は近辺に落ち、水柱を上げる。

その後、すぐに攻撃を行った戦闘機はファランクスによって撃ち落された。

——何とも際どい所だったな……と倉本は胸の中で呟いた。

27話 緒戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7708m/>

2つの大和 ～没落と再生の日～

2010年10月13日03時01分発行